
ただあなたを守りたい

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただあなたを守りたい

【Nコード】

N6491X

【作者名】

白銀

【あらすじ】

神力と呼ばれる力で満たされた大陸。その大陸にある首都クロイセンは光の壁に守られた都市。

首都で暮らすシスター見習いの少女ノイアとシエルは力を失いつつある光の壁に再度力を注ぐために旅に出る。

旅の中、シエルは各地で命を狙われる。その理由とは……。少女シエルを守りぬく、シスターが主人公のファンタジーバトルもののべぷろ！に投稿済みの作品となります。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 1

ただあなたを守りたい シスター見習い編

プロローグ

「……ノイア・フィルランド。貴殿の神力の高さは他の誰よりも高い。だが……力の持続力は最低レベル。最終的に私が下した判断は……今日この時を持ってシスター見習いの資格を剥奪する。以降は指導者としての道を歩むか……または別の道を選ぶかを決めるのだ」
50代後半の司祭はそう告げた。

ノイアと呼ばれた少女はその言葉を聞いて力を失うように膝をついた。目の前は真っ白だった。

「……………」

言葉は出なかった。ただただ絶望する。今までの日々が頭の中を駆け巡る。

「ノイアよ。貴殿が他の誰よりも努力していた事は認める」

司祭は言葉を選んでいるようだった。だがノイアには聞こえていなかった。

（……………嫌だ……………！）

心の中で叫ぶ。シスターになるためにずっと鍛錬を続けてきた。持続力がないのは分かっている。それでも鍛錬を続けてきた。いつか夢を叶えるために。

「……貴殿ほどの努力家だ……指導者になるのは適していると思う」
司祭はノイアの肩に触れた。ノイアの肩は震えている。

「……………嫌です」

ノイアは顔を落としたままつぶやく。

司祭は驚きで目を見開く。彼女なら分かってくれると思っていた。だが帰ってきた言葉は拒絶の言葉。ノイアはふらつきながら立ち上

がる。

「どこに行く！」

司祭はノイアに言葉をかける。

「……私は諦めません。シスターになれなくても……戦う道はありますから」

ノイアは司祭に背を向けてつぶやく。その声には力が戻っていた。
「……そうか」

司祭は密かに拳を握る。彼女は歩み続ける道を選んだ。止める必要はない。立ち止まるのであれば助けは必要だろうが。

ノイアはふらつく足取りでドアまで進み、大聖堂のドアを開ける。眩しい光がノイアを照らす。

「あ……ノイアだ」

ドアを開けた先には修道着姿の愛らしい少女が立っていた。

「シエル……頑張ってたね」

ノイアはシエルと呼んだ少女の髪を優しく撫でる。

「ノイア……？」

シエルは首を傾げる。

「……戻ってきて守ってあげるから……」

ノイアはそれだけを言っただけでその場を去った。向かうのはいつもの場所。あの場所にいたから頑張れた。

「……私はまだ……歩める……諦めない……今度こそ……」
ノイアはただ前を見てつぶやいた。

――

「これでいいかな」

15、16歳くらいの金髪を腰まで伸ばした少女が微笑んでつぶやく。

左手に持っているのはフライパン。焼かれているのは目玉焼き。見た所黄身は固めに焼けている。それを見てコンロから右手を離す。

コンロについでいる石が輝きを失う。それと同時にコンロの火が消える。目玉焼きをお皿に移してから振り向く。

「まだ寝てる」

ベッドの中で丸くなっている少女に温かい視線を向ける。12歳ではあるが実年齢よりも幼く見えてしまう不思議な少女。クスリと笑い、部屋の左端にあるベッドに近づいて艶やかな黒髪を撫でる。

「うーん」

眠っている少女が呻いてから、青色の瞳をゆっくりと開く。まだ目蓋は重そうだ。最年少のシスター見習いで、名をシェライト・ルーベントという。皆はシエルと呼んでおり、この部屋で一緒に暮らすルームメイトである。

「早く起きてよ、私は朝から鍛錬したいから」

なかなか起き上がらないシエルに向けて声をかける。

「う……ん。分かった……よ、ノイア」

だがシエルの反応は鈍い。朝が苦手なシエルは緩慢な動作で起き上がる。短い黒髪は寝癖で所々が跳ねている。ノイアはその姿を見て苦笑してしまう。

「ご飯あるから食べてね」

ノイアと呼ばれた少女がドアノブを掴みながら声をかける。

部屋中央の丸テーブルにはトースト、サラダ、ハム、目玉焼きなどが置いてある。一度シエルは朝食に視線を移してから、ノイアに振り向いた。

「分かったー」

ルームメイトが手をヒラヒラと振る。ノイアはその姿を見てからドアを開けた。

ひんやりとした早朝の空気がノイアの全身を冷やす。時刻は午前5時。まだ誰も起きていない。シスター見習いでこんな時間から鍛錬するのはノイアくらいだ。

木で出来た廊下を歩いてシスター見習いに与えられた宿舎を出る。

宿舎を出ると目の前は石で整備された坂がある。その坂を上りきった所にあるのがクロセイト大聖堂。ノイアとシエルが学び、将来はあの場で働く事を願う場所。

大聖堂はノイア達が暮らす首都クロイセンの中心にあり、そこを中心に住居が並ぶ。首都の南側はノイア達や旅人の宿舎が集まり、北側は商店街となっている。

「……頑張らないと」

ノイアは拳を握って、進路を北西に向ける。大聖堂には午前8時までに行けばいい。まだ向かうには早すぎる。

ノイアが向かっているのは一つの公園。首都クロイセンの北西は憩いの場が多い。その中にある公園に用があるのだ。当然、自然を見て癒されたい訳ではない。開けた場所で鍛錬をするためだ。

「……あの人は今日もいるのかな？」

ノイアは独語する。

実はこんな早朝から鍛錬をしているのはノイアだけではない。そして、シスターでもない。甲冑に身を包んだ騎士の少年だ。二人は同じ場所でお互いに特に干渉することなく鍛錬に励んでいるのだ。

ノイアは相手の名前さえ知らない。

「まあいるよね」

ノイアは微笑む。

おそらくあの少年がいたから頑張れている。一人ではなかなか続かないものだ。名も知らない少年が毎日早朝から鍛錬をしている。その少年に負けないように自分も鍛錬を続ける。もしかしたら相手も同じ事を考えているのかもしれない。邪魔であるのなら場所を移すだろうから。

ノイアは碁盤目状に出来た道を早足で進み公園に足を踏み入れる。木々が左右に立ち並び、頭上を見上げれば生命を感じさせる緑。こんな時間でもこの道で散歩をする人がまばらにいた。

「おはようございます」

ノイアが顔見知りに挨拶。

「おう、おはよう。騎士の子はもうやってるよ」

50代のおじさんが微笑む。

「だんだん早くなってる……負けられない」

ノイアは早足でいつもの場所へと向かう。

「熱心だね……でも、この世界はなんでこんなに不平等かねえ」

おじさんは顔を落とした。

ノイアは木々で出来た道をほどなく歩いて進路を右に向ける。草が茂っている獣道を進みきった所を開けた場所がある。一部屋分のスペースしかなく鍛錬するには狭い。だが誰にも邪魔はされない。その場に銀髪を短く整えた青い瞳を持つ少年がいた。甲冑に身を包み淡々と剣を振る。額には汗が浮かび、少し息が荒い。おそらく一時間は素振りをしているのだろう。整った顔が時折、苦痛に歪む。また手がボロボロになるまで剣を振ったのだろう。

「……神聖なる神よ。我に癒しの力を与えたまえ……」

ノイアは言葉を紡ぐ。刹那、少年の手を温かい光が包む。少年は痛みが和らいだのか、剣を握り直す。

「……すまない」

少年はそれだけをつぶやいて黙々と剣を振るう。

ノイアは一度微笑んでから少年の背後に立ち、背を向ける。これが二人の関係。これ以上は関わらない。だから名前も知らない。

ノイアは一つ深呼吸をする。背後から聞こえるのは素振りの音。あまりにも聞き慣れているため集中力を切らす事はない。

ノイアは天に祈りを捧げる。ノイアの体から眩しい光が溢れる。

「……神聖なる神よ。我らに守りの力を」

言葉と祈りに反応してノイアの前に障壁が展開。祈りを続けて光の壁を維持。

ノイア達が暮らす大陸マクシリアには「神力」という力で満ちている。神力はこの大陸で生活するには欠かせない力である。

夜に読書をしようと思えば、輝石と呼ばれる石に神力を注ぎそれ

を光源にする。夜に首都を照らす街灯も輝石に神力を注いで光らせている。朝、ノイアが料理に使っていたコンロも神力を使い火を起こしていた。この力は6歳を超えた時に宿るものである。だが人によつて力の強さも、身に宿る神力の多さも異なる。中には全く神力を持たない人間もいる。神力を持たない者はガスやら油などを使い火や光源を得ているらしい。

ノイアは強い神力を持つている事からシスター見習いとして大聖堂で鍛錬が続けている。ノイアが張る障壁や、癒しの力の強さはどのシスター見習いでも越える事はできない。だが課題もある。身に宿る神力の絶対量が少なすぎるのだ。強い力は使える。だが維持できない。また使用できる回数も極端に少ない。

その証拠に目の前で展開している障壁が力を失う。ノイアの限界だ。

（まだまだ……）

ノイアは心の中でつぶやく。さらに祈りを込める。突如、全身に痛みが走る。だが止めない。神力の絶対量を増やす方法は限界まで神力を使う事である。限界を越えた時にしか神力は増えない。

「……っ……」

ノイアは顔を歪ませる。

方法は分かっているが限界まで神力を使うのは自殺行為である。全身を破壊するような痛みに耐え切らないといけない。だがノイアは毎日これを繰り返している。その結果、正式にシスターになるために必要な神力の絶対量の半分はある。だがノイアの力の強さに追いついてはいない。

「神力があつても苦しいだけか……」

素振りを続ける少年が独語した。

いつもこの苦しみの声を聞いている。少年にはこの少女がどれだけ努力家なのか知っている。それと同時にこの世界があまりにも不平等である気がしてならない。努力をした者が成功しない。生まれ持った才能が全てを決めてしまう。

少年は神力が使えない。そのため信じる事ができるのはこの剣と、神力が使えない代わりに神が与えてくれた身体能力の高さだけ。

この少年のように神力を持たず、生まれつき身体能力が高い者は「騎士」と呼ばれる職に就く事を勧められる。断れば一般市民として生活はできる。だが、半分ほどの者は「騎士」になる事を望む。それしかこの世界に溶け込む道を知らないからだ。神力がない。それだけで運命を決められた者が「騎士」である。

「……ぐ……ああー……！」

いつものように絶叫が聞こえた。少年が振り向くと少女が荒い息を整えながら膝をついていた。どうやら限界まで使用したらしい。

「……………」

少年が少女を立ち上がらせる。

「ごめん……」

少女は礼を述べる。自らの足で立ち、瞳に力が戻ったのを確認した少年は再び背を向けた。少女は深呼吸をして気持ちを落ち着かせていく。神力が少しでも戻れば再開するつもりなのだろう。二人の無言の鍛錬が早朝の朝に続いた。

*

鍛錬を終えたノイアが宿舎に戻ったのは午前7時半。部屋に戻るとシエルはベッドに座り本を読んでいた。

「おかえりー」

シエルが微笑む。

「うん。行こう」

戻ってくるなり昨日用意しておいた荷物が入ったバッグを肩に背負う。シエルはこの部屋を照らす輝石に手をかざして神力の供給を絶つ。部屋の明かりが消えて、薄暗くなった部屋はどこか寂しげだ。それを見てノイアはドアを開ける。

「行こうー」

シエルが微笑んでついて来る。初めはこの幼いルームメイトには困ったものだった。ノイアの後に張り付くように体をくっつけて歩き、何かあればノイアの胸に飛び込み甘えたりもした。今ではそれにも慣れて世話を焼いている。

だが正確には世話を焼いているなどと言う言葉は使えない。神力の強さだけならノイアの方が上だが、それに匹敵するほどの強さの神力を持ち、絶対量では常にトップだった。100年に一度生まれるかどうかの「神に愛された者」。いずれはシスターの頂点に立つかもしれないと言われている存在なのだ。実際は他にも有力候補がありシエルが頂点に立てるかどうかは分からないのだが。そして、シエルはあまりにも幼い。そして、上に立つには優しすぎる。ノイアはシエルが上に立つのは無理ではないかと思っている。

ふと温かくて柔らかい手がノイアの手に触れる。

「手を握らないで……恥ずかしい」

ノイアは隣を歩くシエルを見てつぶやく。周りの視線が気になつて仕方ない。見る見ると頬は朱色に染まる。

「ノイアの手は温かいから好きなの」

シエルは愛らしい笑顔を浮かべてノイアに微笑む。この笑顔を見ると反論できない。自由にさせてしまふ。ノイアは溜息をついた。

二人は宿舎を出て坂を上る。見えてきたのは大聖堂。三角屋根の先には金色に輝く十字架。左右にはステンドグラスが散りばめられていた。

ノイアは空いている右手で2メートル以上はあるドアを開けて中に入る。シエルも続く。赤い絨毯が敷かれた道の先には教壇。左右には祈りを捧げるための長机と椅子がある。すでに二人と同じ修道着姿のシスター見習いが椅子に腰をかけていた。

「あら、おはよう。……シエルに、その世話係さん」

ウェーブがかかった茶色の髪に、やや吊りあがった髪色と同じ瞳が特徴的な20代前半の少女が二人に挨拶。ノイアは右側に視線を向ける。隠れて拳を握る。優秀なシエルの世話係。これがノイアの

評価。いくら神力が強くて絶対量が少なければただの宝の持ち腐れ。ノイアの評価は「まだいたのか」と言われるくらいに低い。いくら努力しても評価が変化する事はなかった。

「ノイアは……毎日……むぐっ……」

シエルが何かを言いかけたがノイアは口を塞いだ。結果を出さねばどうしようもない。ここで何を言っても無駄だ。

「止めなさい、ミシエル。ノイアは立派な……私どもの仲間です」
優しく耳に心地いい声音。ミシエルと呼ばれた少女の隣に座っている少女が口を開いた。20代中頃の輝くような銀髪を腰まで伸ばした女性で、天使のような慈愛に満ちた笑顔を向けている。

「おはよう、ハーミル」

シエルが元気よく挨拶。ハーミルと呼ばれた銀髪の少女が手を振る。

ハーミルは近日中にシスター見習いを終える。シエルに匹敵するほどの力を持ち、シエルの出世街道を阻む最後の砦。だがこの二人はいがみ合う事はない。どちらが上になっても構わないとすら思える。

(……追いつかないと……)

ノイアは心の中でつぶやく。

ハーミルは心から心配した視線を向ける。この視線に甘えたら終わりだ。諦めてしまおう。だから視線を合わせずに左側の椅子に腰掛ける。シエルは当然ノイアの隣だ。

「そろそろ手を離して……」

ノイアがシエルにつぶやく。

「むー、仕方ない」

シエルは残念そうに手を離す。本当に困ったお姫様である。

シエルの綺麗な黒髪を撫でようと手を伸ばした時に後ろのドアが開いた。皆が一斉に視線を向ける。そこに立っていたのは司祭服に身を包んだ50代ほどの男。年齢を感じさせる白髪の上に司祭帽を被り、丸眼鏡の奥の温和そうな瞳が印象的な男。司祭アーバンだ。

皆が一斉に立ち上がる。シエルだけは反応に遅れている。

「ほら……立って」

ノイアがシエルを催促。ようやく理解して立ち上がる。ミシエルから嘲笑うような視線を感じる。だがそれを無視した。自分にならどれだけ向けられても構わない。ただシエルには何があっても向けさせない。

「皆さん、おはようございます」

司祭が皆に挨拶。皆が頭を下げる。ノイアはシエルの頭に手を置いて下げさせる。

「むぐっ……」

シエルが呻くが今は無視。

その様子に司祭アーバンは苦笑した。アーバンはシエルのルームメイトを決める際にすぐにノイアを指名した。優しいハーミルも候補に浮かんだが、おせっかいなノイアの方が向いていると思ったのだ。

「さて、本日は皆に集まってもらったのには理由があります」

司祭が言葉をつぶやく。皆が頭を上げて、緊張の面持ちで言葉を待つ。シエルだけはよく分かっていないようだ。

「……首都クロイセンを守る光の壁が力を失っている事ですか？」

皆を代表してハーミルがつぶやく。司祭が一度頷いた。

首都クロイセンは光の壁に覆われている。これはシスターの長と各地に散らばる塔に神力を注ぐ事で成り立っている。塔が一つでも破壊されれば首都の守りは手薄になる。そのため騎士の多くは首都よりも塔の防衛に力を注いでいる。強力な光の壁に守られた首都クロイセン。だが、光の壁を失えば陥落するには数日あれば十分であるという脆さもある。

では、なぜ塔を首都の近辺に置かないのか。それには理由がある。この地には神力の影響を強く受ける土地がある。その場で神力を使用すれば10倍以上の効果が得られる。強化された神力を首都に集めて光の壁を形成しているのだ。

ノイア達が暮らすハールメイツ神国は大陸南部に位置している。北西、北東は天然の山々で守られ、背面は海に面して敵がいない。急所である首都は光の壁で守られており、唯一の脅威は北にある強国であるグリア連合国。賢王と呼ばれる王を中心にし、対立する国は圧倒的な武力でねじ伏せ、対話が可能であれば時間をかけてでも説得して取り込んでいる、この大陸最強の国である。グリア連合国が攻撃してこないのは光の壁を突破できないからである。

この国の生命線である光の壁と、力を送る塔。この二つに異常が出た場合は優先事項として全ての機関が協力体制を構築するのが常である。

「うむ。そこで……シスターを塔に派遣する事になった」

司祭がハーミルに向けて一言。

「なぜ……私達見習いに声をかける必要があるのですか？」

声を上げたのはノイア。

「もつともな意見だな」

司祭がノイアに視線を向けて頷く。こんな大切な任務であれば、現職のシスターが行うべき事だ。

「人手が足りないのですね？」

ハーミルが落ち着いた声で返す。光の壁が力を失っているのであれば現職のシスターもここにとどまり長の補助をしなければならぬ。そのため出向ける者は少ない。

「そうだ。だが……誰でも言い訳ではない」

司祭が皆を見つめる。ここにいるのは見習いが20名。

ノイアは思考した。この中で現職ほどの力があるのはハーミルとシエルだけだ。それは皆も分かっている。簡単な任務なら手を上げるが、今回は国の一大事。司祭の決定に従うのが自然である。

「ハーミル、シエル、ノイアに向かつてもらいたい」

司祭は口を開いた。

ノイアは目を見開いた。なぜ自分なのだろうか。だが次の瞬間に理解して顔を落とす。所詮、自分はシエルの世話係なのだ。

「……見習いの担当は二箇所ですか？」

ハーミルが確認。三箇所と言わない所がやはりハーミルが優秀である事が分かる。司祭の考えを読んでいる。

「そうだ。場所は後で知らせる」

司祭が述べる。ノイアは拳を握った。だがそれ以上は何も言わなかった。

「ごめん……」

か細い声が聞こえた。ノイアは慌てて視線を向ける。そこには顔を落としたミシエルがいた。世話係と言った事に謝罪をしているのだろう。ここまであからさまな扱いをされれば哀れみの気持ちも抱くのだろう。失言だったと反省しているようだ。

「……事実だから構わないよ」

ノイアは儂く笑った。その笑顔が痛々しくミシエルはノイアの顔を見られなかった。ミシエルだけではない他のシスター見習いも顔を合わせない。

「何が……事実なのですか？」

疑問の声をあげたのはハーミル。ノイアは視線を向ける。何が言いたいのか分からない。

「今回の任務……あなたは必要です」

ハーミルがつぶやいた。皆が目を見開く。全員が言葉を待つ。

「あなたの神力の強さは現職をも軽く凌駕しています。光の壁を維持する力をここに送るにはかなりの力が必要です。あなたの力で一気に塔に力を注ぎ、足りない分はシエルの力で補うという考えでしょう」

スラスラと語るハーミル。ノイアは首を傾げる。

「シエルだけで十分だよな？ 結局、私は世話係で……」

ノイアがハーミルに言葉を返す。刹那、ハーミルがノイアを鋭く睨む。

「あなたは影で誰にも真似できないような努力をしています。なぜ自信を持たないのですか！」

ハーミルは瞳に涙を溜めて叫ぶ。

「私は力をまだ上手く使えない。一人では無理だよ」
シエルがノイアの手を握る。

「私が……必要？」

ノイアの肩が震える。シエルが頷く。

「見習いの代表です。胸を張って行きなさい」

ハーミルが二人に言葉をかける。二人は頷いた。

「ハーミルも……成功を祈ってる」

ノイアはハーミルに笑顔に向けた。ハーミルは微笑んで頷いた。

「私の出番はないな」

司祭が三人を見て微笑んだ。

＊

旅立ちとは二日後に決まった。その間に護衛に連れていく騎士を見つけるようにと司祭に告げられたノイアは大聖堂での鍛錬を行いながら候補を考えていた。

（……シエルもいるから……女性騎士の方がいいのかな）

心の中でつぶやく。考え事をしているが祈りは継続させている。

今は障壁を張る鍛錬だ。大聖堂の外にある鍛錬用の敷地で皆は瞳を瞑り祈り続ける。

（……シエルが気に入った騎士でもいいけど……候補いるのかな）

やはり司祭のお勧めを教えてもらうのが早いかな）

ノイアは心の中で思考を進めていく。

「ノイア！ そんな障壁で防げるか！」

怒り心頭の声が耳に届く。咄嗟に神力を込める。何かが障壁に衝突する感覚がした。

「本当にすごい障壁だねえ」

チラリと視線を開けると、修道着姿に大剣を持つというあまりにも不釣り合いな人物が立っていた。鍛錬の指導者であるフィンネ教官

である。引きしまった体に180センチオーバーの長身が特徴的な30代の女性。

修道着姿なのはここの所属を示すためで元は騎士である。障壁の鍛錬の際に姿を現し、集中力が切れて弱まった障壁に一撃を浴びせるといふ鬼教官である。気を抜いたら大剣の一撃が待っている。体に直撃しないように止めてはくれるが、その恐怖は体験したくない。「ど……どうも」

ノイアは障壁の強度を調整する。あまり長く張れないので調整は必要だ。

「気を抜くんじゃないよ」

大剣で障壁を二度叩く。何とか弾き返したが、そんな武器で叩くのは止めてほしい。

（……フィンネ教官なら知っているかな？）

ノイアは護衛候補探しに思考を戻す。元騎士ならいい人を紹介してくれるかもしれない。ただそんな事を考えてはいるが、ノイアの頭の中にはあの銀髪の少年が頭に浮かんで仕方ない。実際の実力は知らないが、毎朝と毎晩、鍛錬するほどの人だ。信頼は出来るだろう。だが、あまり話した事がないので深くは知らないのが問題である。

（……自分だけでなくシェルも行くんだからね）

ノイアは溜息をついた。

「ほう……私の前で無防備か」

ノイアは寒気を感じた。視線を開ける。障壁が消えていた。自分の持続時間の短さをここまで恨めしく思った事はない。

「……ひい……！」

変な叫び声を開けて障壁を残った力で再展開。大剣と障壁が激突する。咄嗟に発動したが何とか止めれた。だが、亀裂が入りすでにボロボロ。再度、集中して修復を開始。もう一度叩かれたら割れる。ノイアの頬に冷汗が流れる。

「ずいぶん余裕だな……ノイア」

フィンネ教官がギロリと睨む。完全に今日のターゲットは私だ。涙目で集中を続けるノイアだった。

「今日はここまで」

フィンネ教官が大剣を背に背負い帰っていく。皆は安堵の息を吐いた。四時間の鍛錬中ずっと緊張していたのだ。無理もない。

「フィンネ教官！」

ノイアは教官の後を追って声をかける。

「ほう。まだしごかれないか」

フィンネ教官が楽しそうに微笑む。そんな事は一切ないので、その幸せそうな笑顔を消してください、とノイアは思う。

「違います……えっと聞きたい事がありました」

ノイアが言葉を選ぶ。

フィンネが表情を引き締める。何を聞きたいのか分かったようだ。見習いが二人塔に向かうのは知っているのだから。

「誰か紹介してほしいんだね？ その前に候補はいないのかい？ それに合わせて助言はするけど」

フィンネは顎に手を置いて思考。

「候補ですか……シエルもいるから女性騎士がいいような気がするんです。ただ気になる騎士もいます。私と同じくらいの歳で銀髪の騎士なんですけど」

ノイアが伝えていく。

「女性で外まで護衛を任せられるのはいるけれど……位が上過ぎるねえ。一大事だから頼めば引き受けるだろうけど。それと銀髪で16、17くらいか。ヒューバーか、ロレンス……それかブレイズかねえ。ブレイズなら腕は確かだけど……ちよいと性格がね。悪い奴ではないけれど」

フィンネ教官が瞳を閉じて考え出す。

「ブレイズ……さんはもしかして朝に鍛錬をしていますか？」

ノイアが確認。

「よく知ってるねえ。すごい努力家なんだ。毎朝5時には剣を振ってるよ。寡黙なのがなければ完璧なんだけどね」

フィンネ教官が笑う。

「……ブレイズ……」

ノイアが一度考える。

「なんだい……護衛の騎士はもう決まっているじゃないか。紹介しようか？」

フィンネ教官が問う。ノイアは首を振った。

「いえ……今晚に会うので問題ないです」

ノイアは言葉を返す。

「ふーん。あの堅物に女が……しかもシスター。禁断だねえ」

フィンネが楽しそうに微笑む。

「違います！」

ノイアが大声で叫び返す。

「分かってるって」

フィンネ教官が手を振って去っていく。

「もう」

ノイアは腰に手を当てて教官を見送った。

*

午前中の鍛錬が終わり、現在は昼休憩。ノイアとシエルは大聖堂の隣にある店に足を運んでいる所だ。木で出来たドアを開けて店内に足を踏み入れる。

店内は照明が落とされ薄暗い。カウンター席もあり雰囲気は酒場である。

「好きな所をどうぞ」

店員がにこやかに微笑んだ。二人はカウンター席ではなくて二人用のテーブルに腰をかける。

「面白いね」

シエルが天井を指差す。視線を上に向けると輝石が神力を注がれて光っている。その輝石を囲んでいるのはガラスではなくて、焦げ茶色をしたバケツ。

「雰囲気はあるわね」

ノイアがつぶやく。なんだか酒場っぽいけれど、と心の中で付け加えはしたが。メニューを覗くとパスタやらピザが並んでいた。飲み物を見るとやはりお酒もあった。

「私はこれがいい」

シエルが指差したのはシーフードドリアだった。

「うん。分かった」

ノイアが手を上げる。店員が来たのを見て口を開く。

「このドリアを二つ」

ノイアが笑顔で注文。店員はメモを書いて戻っていく。

「お揃いだね」

シエルが笑顔を向ける。ノイアはシエルに微笑む。

「今日はどうしたの？」

シエルが首を傾げる。いつもは宿舎に戻るか、適当にパンとサラダを食べて終わりである。今日はいつもと比べればリッチだ。

「うん……護衛の騎士の事でね。相談があつて……」

ノイアは珍しく歯切れが悪い。

「護衛？ ノイアと一緒に鍛錬してる人は駄目なの？」

シエルが再度、首を傾げる。どうやらその人物が護衛に就くと思っ
ていたらしい。

「いいの？ 女性騎士の方がいいかと思うんだけど」

ノイアがシエルに確認。

「ノイアが信じた人なら……いいよ」

シエルが微笑む。ここまで信頼してくれる。ノイアは心が温まる
気がする。

「なら……声をかけてみる。無理なら司祭かフィンネ教官が選んだ
人にするよ」

「うん。それでいいよ。いつもありがとう……ノイア」
ノイアの提案に頷くシエル。二人は迷いが晴れて美味しくランチをいただいた。

*

正午を過ぎた頃。騎士団長の部屋の前に立っているのはブレイズ・マチエスだ。戸惑う事無くドアをノックする。
「入れ」

声を聞いてブレイズはドアを開ける。

部屋に入ってまず目を引くのは巨大な机。そして、その机に置いてある書類にサインをしている大柄で筋肉質な男。ブレイズと同じ銀髪をオールバックにし、無造作に伸ばした髭が印象的な人物。騎士団団長のアルフレッドである。

「お呼びでしょうか？」

ブレイズが声をかける。

「ああ。大聖堂で指導者をしているフィンネから報告があつてな」
アルフレッドはまず言葉をかける。ブレイズは意味が分からないので首を傾げる。

「光の壁の強化ためにシスター見習い三名が首都を出るらしい。その護衛にブレイズが選ばれる可能性がある」

アルフレッドはそう告げた。

（……どこ物好きだ）

ブレイズは心の中でつぶやく。腕だけで選んだのだろうか。

「おそらく指名する者は君が知っている人物だ」

アルフレッドが続ける。

「知っている？」

ブレイズは首を傾げた。シスター見習いで知っている人間などいただろうか。そこまで考えた時に一人思い出した。

「分かったようだな」

アルフレッドが表情を変えずにつぶやいた。

「了解しました」

それだけを言ってブレイズは背を向けた。務めであるならば、ただこなすのみ。それがこの国を守る事に繋がるのであれば。

「任せる」

アルフレッドはブレイズの背につぶやいてから書類に目を落とした。

*

午後の鍛錬は癒しの術式を使用するものだ。シスターが主に使う術式は障壁を張るか、傷を癒す事だ。そして、この国においては首都を囲う光の壁を維持する事に一生を捧げる者。

ノイアは瞳を閉じて祈りを捧げる。ノイアの地面に光で作られた円が形成。その円には読む事ができない言語が書き込まれており、魔方阵にも見える。

「上手く維持して下さい」

指導役である修道着姿の20代後半の女性がつぶやく。

ノイアは集中する。障壁よりもこちらの方が苦手なのだ。冷汗が

ノイアの頬に伝う。

「い……痛い！」

ノイアが叫ぶ。刹那、癒しの術式が暴走。閃光が溢れる。

「ちよつと……ノイアさん……またですか！」

指導役が声を荒げる。

そうまたなのだ。ノイアはよく癒しの術式を暴走させる。癒す所か、強すぎる力が暴発して痛みすら伴う本末転倒の術式になってしまう。

「ごめんなさい……」

ノイアは肩を落とした。もう少し簡単な術式なら難なく使用できるのだが。

「簡単な術式だけにしなさい！」

指導役にすら見放されたノイアは、朝に使用した神力があれば誰でも使用できる術式を使う。他の者が使用すれば掠り傷を直す程度だが、ノイアが使えば瀕死の重傷でも塞げる。規格外の神力の強さをしているノイアはこれだけいいのではないかと思っている。暴発させて味方が傷つくくらいならば。

チラリと隣を見ると光の円に照らされているシエルがいた。シエルは癒しの術式が得意なのだ。この歳で何時間でも維持できる。だが障壁はたまに力加減を間違えて失敗する事もあるのだが。

「シエルちゃんはずごいわね」

指導役は大満足である。

「えへへ……これは得意だよー」

シエルは微笑む。もし護衛が怪我をしたらシエルに任せようと思うノイアだった。

かれこれ四時間が経過。そんな時に声が聞こえた。

「これで終了です」

指導役の鍛錬の終わりを告げる声だ。皆は一日の鍛錬を終えて疲れ果てていた。力が抜けて膝についている者もちらほらという。

「晩御飯作っておくね」

シエルがノイアに笑顔を向ける。

「うん……お願い」

ノイアがつぶやく。これから夜の鍛錬をするのだ。

「まだ……やるのですか？」

ハーミルが声をかける。ノイアの鍛錬時間は異常だ。

「うん……私は人よりも頑張らないと」

ノイアはつぶやいてハーミルの隣を横切る。だがハーミルがノイアの腕を掴んだ。

「……ハーミル？」

ノイアは首を傾げる。

「あなたは頑張りすぎです」

ハーミルは前を見たままつぶやく。周りが注目する。皆も同じ意見らしい。一日鍛錬をするだけでも辛い。だが、ノイアは朝も夕方も鍛錬を続けている。神力の絶対量を上げるために。

「……それでもやらないと……」

ノイアは笑う。

「何のために？」

ハーミルはノイアを見つめた。

「え？」

ノイアはハーミルの瞳を見て目を見開いた。ハーミルの瞳は迷い揺らいでいたのだ。

「教えて……」

ハーミルは再度、言葉をかける。ノイアは真摯な瞳を受け止めてから口を開く。

「……この国を守りたい……それに……シエルも」

ノイアはシエルに向けて微笑む。それが本音だった。

「あなたと言う人は……」

ハーミルは微笑んで手を離した。ノイアは一度微笑んで背を向けた。

「なぜ……あのような真っ直ぐな方に力を与えないのですか」

ハーミルは顔を落としてつぶやいた。

*

ノイアはいつもの場所に足を向ける。鍛錬のためとブレイズにお願いするためだ。

獣道を進むと素振りの音が聞こえた。もう鍛錬をしているらしい。ハーミルは先ほどノイアを止めたが、このブレイズという少年の方が鍛錬中毒だと思う。

「あの……」

獣道を抜けた瞬間に声をかける。

「……………」

ブレイズは一度視線を向けたが、再び素振りを開始。

「えっと……話があるんです」

ノイアが言葉を選ぶ。今さらになって、もう少しコミュニケーションをとっておくべきだったと思う。

「……………」

ブレイズは手を止める事はない。

「えっと……」

ノイアは戸惑う。どう話せばいいか分からない。ブレイズは一度溜息をついた。

「……聞いている」

ぼそりとつぶやいて素振りを続ける。

「……神聖なる神よ。我に守りの力を！」

言葉と共に障壁を展開。ブレイズは驚きで目を見開く。障壁とぶつかった剣が弾き飛ばされる。かろうじて剣が腕から抜けるのを防いだ。

「……何をする」

ブレイズがノイアを軽く睨む。

「話くらいはこちらを見て聞いてよ！」

腰に手を当ててブレイズを指差す。ブレイズは再度、目を見開いてノイアを見た。

「……悪かった」

ブレイズは勢いに負けて、なぜか謝罪の言葉を述べていた。謝罪の言葉を聞いた瞬間にノイアの思考は急激に冷める。そして、次の瞬間には焦りだした。護衛を頼みに来たのに、何をやっているのだらう。

「ごめんなさい……えっと、お願いがあるんです」

平静を取り戻したノイアが何とかつぶやく。微笑む事に成功した。ブレイズは気にした様子もないのだが。

「……護衛の件か？　なぜ俺なんだ？」

ブレイズがノイアを見つめる。こちらの瞳を真っ直ぐに見つめてくる。決して逸らさない。

「ずっとここで鍛錬をしているのを知っているから……あなたなら信じられる」

ノイアは思いついた言葉を伝える。

「……まあそうだろうな。俺もお前でなければ断っていた」

ブレイズは瞳を閉じた。

「それなら……！」

ノイアが一步步む。

「お前は……何のためにシスターになる？」

ブレイズは問いと共に剣をノイアの首に当てる。少し前にハーミルにも問われた。もう迷いはない。

「私は……ただ守りたい。この国を……シエルを！」

ノイアは力を込めてつぶやいた。

「ふっ……そうか」

ブレイズは剣を降ろした。

「笑うことではないでしょう！」

ノイアは拳を握って抗議。

「すまない……俺も一緒なんだ。守りたいんだよ……この国をな」

ブレイズが微笑む。

「同じ……？」

ノイアはつぶやく。同じ理由で、同じ場所で鍛錬を続けていた二人。

「ああ。同じだ……。いいだろう、俺は力を貸す」

ブレイズが左腕を掲げる。

「よろしく……ノイアよ」

ノイアも倣って腕を上げる。二人は腕が一瞬だけ触れる。

「ブレイズだ」

二人は頷き合った。

*

夜の鍛錬を終えてノイアは宿舎に戻った。

テーブルに並べられているのは小皿に載ったハンバーグ、サラダ、そしてパンだった。それを作った人物はベッドの中で丸くなっていた。待ちきれなくて寝てしまったらしい。

「シエル……帰ったよ。お風呂入ったの？」

ノイアがシエルに問う。

「うー」

シエルが起き上がる。普段は愛らしい少女なのに、今は寝癖がついて残念な少女になっている。やはり笑ってしまう。

「ノイアが食べたら一緒に入るー」

シエルがトロンとした瞳を向けて微笑む。

「本当に世話が焼けるんだから」

ノイアが微笑む。世話が焼けるがやはり可愛い。だから許してしまおう。

「たくさん食べてね」

シエルが微笑んで視線を向ける。ノイアは言われるままハンバーグを一口サイズにして口に運ぶ。すでに冷めていた。でも、温かかった。

「美味しいよ」

ノイアが微笑む。

「うん！」

シエルも微笑む。ノイアが食べ終わるまでシエルはずっと見つめていた。

*

とある酒場のカウンターに、長身に似合った黒いロングコートを

着た青年が腰掛けている。

「マスター、お酒」

気楽そうな微笑を浮かべて手をヒラヒラと振り、髪と同じ茶色の瞳を向ける。

「今日はよく飲むな。金でも入ったか？」

50代後半のマスターがワインのボトルを青年の前に置いた。

「まあ、これから……ね」

ワインをグラスに注ぎながら一言。

「ほどほどにしろよ……傭兵稼業なんてそう長く続かないぞ」
マスターが溜息をつく。

「あいよ」

青年が再度手をヒラヒラと振った。そんな時に後ろのドアが開いた。青年がゆっくりと視線を向ける。

茶色のローブを纏った男が青年の隣に座る。丸テーブルで酒を飲みながら下品に笑う男達は視界に入れてすらいなかった。青年は視線を向けるが、フードをしているために顔はよく見えない。傭兵に仕事を頼む人間にはこういう素性が分からない人間が多い。

「あんたが……お客？」

青年は空になったグラスを置いてから問う。フードを被った男が頷いた。

「こいつを消してほしい」

一枚の人相書きを青年に渡す。人相書きに描かれているのは、まだ幼さが残る愛らしい黒髪の少女だった。

「おいおいガキかよ」

青年は頭を掻いた。

「……まだ12歳だが強い神力の持ち主だ」

フードの男がつぶやく。

「ふーん。あんたは連合の方が」

青年は人相書きを見つめる。それから視線を向ける。

「いくらだ？」

青年は問うた。フードの男が袋を取り出す。中身は見えないが全部金貨なら10年は遊んで暮らせるだろう。

「おいおい。そんなに払うのかよ」

聞いておいてなんだが子供一人を消すのにその額は有り得ないと思っただ。

「受けるのか？」

フードの男が問う。

「ほい」

青年が手を差し出す。

「成功報酬だ」

フードの男は首を振る。よくあるパターンだ。失敗したら終わり。成功して受け取りに来たら消す。最悪の依頼である。青年は溜息をついて席を立つ。

「悪いマスター……今日は払えない」

青年がにこやかにマスターに述べる。

「おい……」

マスターが低い事を出した。

「こいつに言ってくれ」

青年がフードの男を指差す。マスターがフードの男を睨む。

「おい……10年は遊んで暮らせる金だぞ！」

フードの男が立ち上がる。青年は無視して背を向けて去っていく。
「待て！」

再度、青年の背に向けて叫ぶ。

「なら聞くけど……10年遊べる金が命……どちらを選ぶ？」

青年が振り向いて問う。フードの男が顔を落とした。ほとんどの者は命を選択するだろう。

「次からは前金くらい払うんだな」

青年が手を振った。

「半分出す！」

フードの男が袋を青年の背に向ける。

「まだまだ青いねえ……。ま、こちらとしてはありがたいけどな」
青年が袋を受け取る。金貨を一枚マスターに向けて投げる。
「助かるよ」

マスターはそれだけを言っただけ後は無視をした。関わりたくもないという顔をしている。青年は袋から金貨を半分出して、袋を返す。
「では……頼む」

フードの男は長居をするつもりはないのかすぐに去って行った。
完全に消えてから青年は口を開く。

「さーで、どうしようかねえ」
軽い口調でつぶやいて酒場を後にした。

*

明日の準備のために鍛錬を午前中で切り上げた二人は、準備をしていた。

「シエル……必要最低限だよ」

ノイアがシエルに言葉をかける。

「うー、でも」

シエルは迷っていた。シエルの荷物袋はどんどん膨らんでいる。
もはや入らない。

「分かった……私がやる……」

ノイアが溜息をつく。自らの荷物はだいたい出来ている。後はシエルと自分の荷物を見比べて被っている物と、不要な物を出していけばいい。

「あーそれは」

シエルが荷物袋から取り出された枕を悲しそうな目で見つめる。
「いらない」

ノイアは心を鬼にしてベッドに向けて放り投げる。枕が違つと眠れないのは知っている。だが旅には不要だ。

「うー、今日のノイアは冷たい」

次々取り出されていく荷物をシエルは悲しげに見つめるのだった。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 1（後書き）

読まれた方で感想、批評がありましたらお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 2

ただあなたを守りたい シスター見習い編

―2―

「これで……いいか」

ロングコートを羽織った青年は金貨の入った袋を差し出す。

「……よくもこれだけ集めてくるものだ。これだけあれば五年は楽に暮らせるだろうに」

白衣を着た薬師が袋をまじまじと見つめる。

「……汚れ仕事の報酬だ。当然だろう」

青年は努めて明るくつぶやいた。平静を装っているが、長年関わってきた薬師には彼が心身共に疲れているように見える。

「……そうだな。だが、これでけあっても診れるのは五年ほどだ……」

薬師は顔を落とした。薬師が調合する薬は今だに量産が難しく破格の値段がついている。一般の者では買う事すら敵わないが、この薬しか効かないのであれば買うしかない。

「……それは仕方ないさ。これが……俺が出来る最後の親孝行だ」
青年は短く言って背を向ける。

「会っていかないのか？」

薬師が問う。

「……会える訳……ないだろう。こんな汚れた手でさ」
青年は振り向いて優しく微笑んだ。大きな背中はどこか寂しげである。

「これから……どうするんだ。まだ……続けるのか！」

薬師が背に向けて叫ぶ。薬師には彼がどうするのか分かっている。まだ薬を買う資金は必要だ。止めるとは思えない。ただ彼はもう十

分に尽くしたと思えてならない。

「さてな……ただ、その金はどうも危険だ……」

青年は前を向いてつぶやく。薬師は言葉を待つ。

「だから……確認してみようと思う。自らの目で」

青年は空を見てつぶやく。

「今度こそ……死ぬかもしれないんだぞ」

薬師が最後の静止の声を掛ける。

「それも……いいのかもな。俺は少し疲れたよ」

それを最後に青年は片手を上げて去って行く。薬師はただただ顔を落としただけだった。

*

肌寒さを感じさせる風が金髪を揺らす。時刻は午前5時。視線を上に向けると、うつすらと日が上り始めている。

ノイアは現在、首都クロイセンの城門前にいる。他にはシエル、ハミル、そして司祭アーバンがいる。向かい合うように、城門を背に立っているのは護衛の騎士達だ。

「……定刻だな」

深みを感じさせる声が響く。視線を向けると騎士団団長であるアルフレッドが数歩前進。アルフレッドの左には禿頭の大男がいる。騎士団の副団長であるセクメトである。

「護衛をよろしく頼みます」

司祭アーバンが恭しく礼をする。

「この命を掛けて」

セクメトが胸に拳を当ててつぶやく。それを合図にしたようにセクメトの背後には甲冑を纏った騎士四名が待機。

「皆さんがいれば安心です」

ハミルが笑顔で礼をする。

「将来を担われるハミル様の護衛を勤める事ができ……光栄です」

セクメトが頭を下げる。他の騎士も倣う。

「や……止めてください。それは周りが勝手に騒いでいるだけです……。私はまだただの見習いなのですから」

顔を真っ赤にして慌ててつぶやくハーミル。

騎士達の待遇はあまりにも過度である。本来ならば見習いの護衛は一人か二人である。だが、ハーミルの護衛は五人。しかも、副団長まで同行するという異例の事態となっている。それだけ期待されているのだろう。

「ここまで差が出るとはな」

ノイアとシエルの前にブレイズが立つ。

「見習いなんだから、これが自然」

ノイアは一つ溜息をつく。

「私は二人がいれば安心だよ」

シエルが愛らしい笑顔を二人に向ける。二人は一つ頷いた。

「貴殿達の出発はもう少し待ってくれ」

アルフレッドがノイアに向けてつぶやく。

「はい！」

ノイアはアルフレッドに向けて背筋を伸ばして力強くつぶやく。

「……貴殿の噂はいろいろと聞いている。君のような存在が騎士団にいれば嬉しいのだがな」

アルフレッドはノイアのような真っ直ぐな人間が好きである。努力する者は決して見捨てない。この人柄に惚れて騎士を目指す者がいるのも事実である。神力を持たず絶望した者が最後に頼る存在なのがこの男だ。

「私には神力がありますから」

ノイアは背筋を伸ばしたままつぶやく。

「だが絶対量が低いと聞いている。その代わりに騎士の素養があるのだろう？」

アルフレッドが真摯な瞳を向けて問う。

「はい。実はナイフを少し使えます。身体能力もフィンネ教官が言

うには……失礼ですけど下手な騎士と比べれば優れているらしいです。でも……私は人を刃で傷つけた事ありませんし……シスターなんです」

ノイアは微笑んでつぶやく。

「その真っ直ぐな姿勢……気に入った。その心を忘れるな」

アルフレッドは微笑んでから背を向ける。

それと同時に馬の鳴き声が響く。ハーミル達が出発するのだろう。ハーミルは副団長の背に体を寄せて、肩を震わせている。どうやら馬に乗るのは初めてらしい。怯えた彼女を守るように四人の騎士が周りを囲む。完全な体勢だ。

「俺達も準備するぞ」

ブレイズが二人につぶやく。その手には馬の手綱が握られている。「そうだね」

ノイアは頷いて手綱を受け取る。シエルはぴつたりとノイアの背に体をくつつける。

「馬を操れるシスターがまさかいるとはな。本当に騎士になったらどうだ？」

ブレイズは少しだけ呆れている。

「……どうせシスターらしくないですよ」

ノイアは頬を膨らませて馬に乗る。シエルは慣れた様子でノイアの後ろに乗った。

「護衛する方は楽でいい」

ブレイズは馬に乗ってから微笑む。

「では……行きますか」

ノイアが馬を走らせる。並走するようにブレイズが馬を走らせた。

*

ノイア達が向かう塔は、首都クロイセンから馬を北西に走らせて五日はかかる位置にある。北にある強国グリア連合の国境にも近く、

最重要拠点の一つでもある。そんな大切な拠点に見習いが派遣されたのは、先日新しく塔が建てられたからだ。仮に失敗した場合は新造の塔に神力を送り、国境に近い塔は破棄する予定だ。光の壁が力を失っている状況で、シスターが派遣されないのは不自然極まりない。そこで選んだ手段が見習いの派遣である。

「……」

ノイアは口を閉じて思考する。自分達の役目はおそらく罔。本命はハーミル達だ。水面下で将来に向けての段取りが進んでいるような気がする。将来を担うだろうシスター見習いの二人であるハーミルとシエル。現在ではハーミル派が多いのだろう。この任務で上手くハーミルに恩を売り、あわよくば邪魔なシエルを消そうとしているのかもしれない。ノイアは馬鹿らしいと思う。この国に内輪揉めをしている余裕はない。光の壁を失えば圧倒的な力に押され、数日でこの国は滅びる。ハーミルとシエルはこの国の未来には必要なのだ。それを理解せずに己の利益に走ろうとしている者がいる。

「……アルフレッド団長はシェライト派だ」

突然、ブレイズがつぶやく。驚いてノイアが視線を向ける。どうやら考えていた事は同じらしい。

「……うん？ 私？」

シエルは首を傾げる。

「どういう事？ 団長は副団長をハーミルの護衛に……」

ノイアが言葉を返す。

「副団長はハーミル派だ……。この機会にハーミルに顔を覚えさせ……恩を売り、団長になるつもりなのかもな。団長は……この馬鹿らしい内輪揉めを終わらせたいと考えている」

ブレイズは前を向いてつぶやく。この国を想いハーミルを支持するならばいいのが、己の権力のためにハーミルを指示する者を止めたいのだろう。

「……そう。私は団長を支持するわ」

ノイアはブレイズに微笑む。

「ふっ……お前は後ろで首を傾げてる者を守りたいだけだろう」

ブレイズがシエルに微笑む。

「うー、何の話」

シエルは頬を膨らませている。

「簡単だよ。シエル……ただあなたを守りたい……何があっても」

ノイアは微笑んで馬を走らせる。

「ありがと」

シエルはノイアの背に柔らかな頬を押し付けた。

*

首都クロイセンを出るとすぐに道が三本に別れる。北、北東、北西に向かう道だ。ノイア達が進んでいるのは北西へと向かう道である。

クレイア街道と呼ばれるこの道は、北に向かう道とは違い整備が進んでいない。無造作に生えた雑草が道のあちこちに生え、道を走る馬はかゆいのか痛いのか知らないが時折鼻を鳴らしている。この道を二日馬で走るとクレイア砦がある。塔の防衛部隊が突破された際の予備兵力が置かれ、また塔に向かう者が体を休める場所でもある。ノイア達が目指す第一の目的地である。

「ここまで整備されていないとはな」

ブレイズが溜息をつく。

「でも、綺麗だよー」

シエルが街道の左右に咲いている花々を指差す。黄色、赤など色とりどりの小さな花が可憐に咲いている。ノイアも視線を向けて表情をほころばせる。

「……花が咲く。それだけ平和という事か」

ブレイズは少しだけ表情を緩める。ここはまだ首都に近い。戦いの傷跡がないのは素直に嬉しく思えた。

「ねえ……あっち」

シエルはすでに花から視線を移してとある場所を指差す。指差したのは左側にある小高い丘を登った所にある休憩所だ。岩で出来たベンチが二つに、四角いテーブルが一つ。その上には雨を防ぐドーム型の天井がある。

「休みたいの？」

ノイアが後ろに問う。皆に向かうには真っ直ぐに進む必要があり、あまり寄り道はしたくない。だが、どうしてもシエルが気になる。

「うん……座っていると痛い」

シエルがノイアの背を抱く力を強める。ノイアは困った顔をする。本当に甘えん坊なんだから」

ノイアは溜息をついてからブレイズに視線を向ける。

「待て……」

ブレイズが休憩所に視線を走らせる。

「どうしたの……？」

ノイアが首を傾げる。

「……一つ教えてやる。休憩所……またはその付近では油断するな」
ブレイズは全く警戒を緩めない。ノイアも視線を走らせる。刹那、一本の矢が視界に入る。

「くっ……！」

ノイアは矢をナイフで弾く。ブレイズが警告してくれなかったら反応できなかった。

「ナイフが使えるというのは本当らしいな」

ブレイズが剣を抜いてノイアの前に立つ。その瞬間に薄い茶色のローブを纏った数人組みが去って行った。ブレイズはそれを見届けてから剣を収める。

「……びっくりした」

シエルがノイアを強く抱きしめる。

「どういう事……？」

ノイアは前に立つブレイズに問う。

「休憩所では皆油断するものだ。ああいう輩にはいいターゲットだ

ろう」

ブレイズは溜息をついて説明。

「……でも、シスターを狙うなんて」

ノイアは驚きを隠せない。

「……シスターを殺せば隣国から多額の金が入る。他に理由があるのなら逆恨みだな」

ブレイズが振り向く。どこか悲しそうな顔をしていた。

「……そんな……」

ノイアはショックを隠せなかった。

「俺達は神力を持たない。持ち前の身体能力で騎士になる者もいるが……盗賊や傭兵になる者もいる。生きていくには手段を選ばないんだよ……彼らはな」

ブレイズは顔を落とす。一步間違えばブレイズもあの者達の仲間になっていた可能性もあるのだ。決して他人事ではない。騎士になった以上はああいう者に剣を向ける機会は今からたくさんあるのだろう。

「お金のために刃を向ける者が……いるなんて……」

ノイアは自分の甘さに嫌気が差す。それだけシスターという地位に甘えていたのだろう。

「あの人達も困らない世界にしたいね」

シエルは何気なくつぶやく。二人は目を見開く。

「……なるほど。団長が選ぶだけはあるようだな」

ブレイズは短くつぶやいてから馬を走らせる。ノイアは沈んだ心のまま馬を走らせた。ただノイアの馬の動きは悪い。馬は人の心情に敏感だと言うが、それは本当らしい。

「お願い……今は走って」

ノイアは短く馬に話しかける。馬は一度だけ鼻を鳴らしてから今まで通りに走り出した。

「将来を担うかもしれないシスターか……」

40代後半の男が窓の外を見ながらつぶやく。礼服に身を包んだ長身の男で、名をヴァンスと言う。首都クロイセンの政治を任されている男だ。

「はい。ただ同じ時代に二人も優れた才を持った者が生まれたのが問題なのです」

ヴァンスの後ろに立った男がつぶやく。

「争いの原因になるか……だからと言って100年に一度生まれるかどうかの神力を持った者を消すとは」

ヴァンスは振り向いてつぶやく。理解できないという顔をしている。

「現在はハーミルを支持する者が多いのです。後手に回れば……最悪、内乱が起こるのですぞ！」

男が叫ぶ。

「くっ……だが、私はもう少し見てみたいのだ」

ヴァンスは拳を握りつぶやく。あのシェライトという少女が歩む道が見てみたい。あの無垢な少女ならこの歪みきつた国を正せる気がするのだ。

「分かりました」

男は一度頭を下げて退出する。

ドアを閉め数歩通路を歩いた瞬間に拳を握る。

「やはり手を尽くしておいて正解だったか。ヴァンス殿は甘すぎる」

男は不気味な笑みを浮かべて去って行った。

*

ロングコートが風に揺れる。

「ずいぶん久しぶりだな……この国」

地図を見ながら歩いているのは傭兵ジュレイドである。消すよう

に依頼された少女シエライト・ルーベントをこの目で確かめるために、ジュレイドは黙々と歩く。

情報屋の話ではあと二日後にターゲットはクレイア砦に入るらしい。このまま進めば彼らがたどり着くよりも前に目的地に着けるだろう。

「……あれは……」

ジュレイドが独語して空を見上げる。白い鳩がジュレイドに向けて飛んでくる。

「仕事か……？」

ジュレイドは右腕を上げる。鳩がその腕に着地。足についた手紙を外した瞬間に、役目を終えた鳩は一度空へと戻る。

「騎士団団長のアルフレッドか……こんな有名な奴からの依頼とはね」

ジュレイドは手紙を見て微笑んだ。

「一方では消せと依頼され……一方からは守れか……モテモテだね」

ジュレイドは手紙のポケットにしまい歩き出す。自らの道を決めるために。

*

「日が沈むか」

前を進むブレイズがつぶやく。

「そうね」

ノイアが一つ頷く。辺りはすでに薄暗い。少しでも明かりがある内にテントを張りたい。

「ここまで来る事ができれば問題ない」

ブレイズが馬から降りて街道を右にそれていく。目の前に見えるのは森だった。

「今から森に入るの？」

ノイアが確認。視界が悪い状態で足場の悪い森に入るなんて正気とは思えない。

「すぐにテントを張れる場所がある。ここは首都クロイセンとクレイア砦のちょうど中間地点。休憩場所として森を切り開いている」
ブレイズが振り向いて説明。

ノイアはすぐに納得した。馬でも二日かかるのだ。ならば休む事ができる場所を予め用意しておくのが理想的だ。

「すごい、すごい！」

シエルは森に入った瞬間に騒いだ。切り開かれた道の左右の木々には輝石がつけられていたのだ。シエルが手を向けると神力に反応して輝石が輝く。森が三人を祝福するように輝いて出迎える。輝石から漏れた光の粒子が宙を踊るように舞う。

「綺麗……」

ノイアは溜息が出た。

「これが……俺にはない力か……」

ブレイズがつぶやく。

ここには何度も来た。だが、ランプだけで進む森の道は不気味でしかなかった。今の心を洗うような温かな光など見ることすらなかった。ハールメイツ神国がなぜシスターをここまで重要に扱うのかブレイズはようやく理解した。神力が使えない人間にはこの光景は奇跡と言う他ないのだから。

「行こう」

いつの間にか隣に並んだノイアが笑う。空間を満たす光の粒子に照らされたノイアの笑顔は言葉にするのも難しいくらいに綺麗だった。

「そうだな」

ブレイズは微笑んでから歩を進めた。

奥に進み頭上を見上げると森の木々の枝があちこちで伸び、開けた空間をドーム状で囲っている。ぐるりと周りを見ると木々に囲ま

れ、木々の間から漏れる月明かりが地面を照らしている。不思議な事に今までは木の幹でいっぴいだった地面は綺麗な平ら。ここならば一つくらいならテントが張れそうだ。

三人は馬の手綱を木々に縛り付けてから、手分けをしてテントを張り、地面に輝石が入ったランプを置く。来た道を照らしていた輝石への力の供給を止めて、次はランプに力を注ぐ。

「何か作るね」

ノイアが馬に括りつけてあった荷物袋から、パンと、お湯に溶かせばすぐに飲む事ができるスープを取り出す。この五日間は簡単な食事しか出来ないと思うと少し寂しさを感じる。

「木を集める必要はあるか？」

ブレイズが問う。二人は首を傾げる。その反応にブレイズは戸惑った。

「これがあればいいよ」

ノイアが取り出した物は携帯用のコンロだ。中におそらく輝石が入っているのだろう。

「……まるで魔法使いだな」

ブレイズが顔を落としてつぶやく。手をかざすだけで火を得る彼女達。自分とは違った人種に見えて仕方ない。

「……使えないんだよね」

ノイアがぎこちなく笑う。少しでも神力が使える者なら誰でも使えるような代物なのだ。それが使用できない。二人の間には深い溝があるような気がしてならない。

「使えない物にこだわっても意味はないな。料理は任せる」

ブレイズは地面に座り瞳を閉じる。瞳は閉じているが警戒は緩めない。何者かが接近すればすぐに気づく。現在、三人の周りにいるのは一人だけだ。首都クロイセンを出てからずっと感じる気配。

「……」

ブレイズは一度溜息をついてから料理にいそしむ二人を見つめるのだった。

*

時刻は午後１１時。寝ずの番をしていたブレイズはゆっくりと瞳を開ける。チラリと視線を向けると一つの毛布の中で眠るノイアとシエルがいた。一方的にシエルがノイアに抱きついていていただけのだが。

「平和な二人だな」

ブレイズは独語して立ち上がる。テントから出て三人が来た道を真っ直ぐ見つめる。三人を監視していた気配がゆっくりと近づいてくる。

まず目についたには輝石で輝くランプだった。だがシスターではない。身に纏っているのは真紅の甲冑。ブレイズはその甲冑を見て誰だかすぐに分かった。

「聖騎士……ルメリアか」

ブレイズはつぶやく。

「初めまして……ブレイズ」

騎士がうつすらと微笑んで挨拶をする。甲冑と同じ真紅の髪に、すらりとした体躯。女性騎士の中でも一位、二位を争う腕を持つ人物だ。剣の腕も優れているが、驚くべきは騎士でありながら神力が使える事である。両方の力を得た規格外の騎士に与えられた称号が聖騎士だった。

聖騎士の称号は今の所はルメリアしか持っていない。理由は二つある。

一つは二つの力を持つ者が稀であるという事である。国に二人か三人いればいくらいである。そして、もう一つ。これが一番の課題である。神力は本来は神聖な力。穢れた手ではその効力が失われてしまう。簡単に言えば人を傷つけてしまえば徐々に力を失ってしまうのだ。では、なぜ騎士など勤めていられるかと言えば、このルメリアという人物。人を殺さずに武器だけを破壊できるだけの腕が

あるからだ。

「……………」

ブレイズはどう言葉をかけていいか分からない。それだけ騎士としての格が違う。

「そう緊張しないで……二人の様子はどうか？」

ルメリアが問う。

「今は……ぐっすり眠っている」

ブレイズがテントに視線を移す。

「そう……なら安心ね。私は少し離れて様子を見ているわ。何かあれば介入するから。ただあまり期待しないでね。公ではあなたたちの護衛ではない。出来れば一度も介入せずに終わりたい」

ルメリアはそれだけを言っって背を向ける。

「分かった」

ブレイズは短く言っってテントに戻った。

*

早朝。ノイアは暑さを感じて瞳を開ける。

「ノイアー」

甘ったるい幸せそうな声が耳元で聞こえる。原因はどうやらシエルらしい。シエルの両手と両足がノイアを捕まえて離さない。先ほどからシエルが動く度に柔らかな頬がノイアに触れる。

「もう……………」

ノイアは溜息をつく。だがシエルの幸せな寝顔を見ていると注意できない。

「……なあ」

声に反応して視線を向ける。声を掛けてきたのは当然ブレイズ。

「なに？」

ノイアは問う。

「シスターは……その……同姓愛はいいのか？」

ブレイズが真顔で質問。ノイアは言葉の意味を理解した瞬間に顔が真っ赤になる。

「駄目に決まってるでしょ！」

なぜか叫んでしまった。

「そ……そうか」

ブレイズはその勢いに押されて、頬に嫌な汗が流れる。

「もう朝？」

目を覚ましたシエルが問う。

「少し早いけど……今日には砦に着きたいから起きるよ」

ノイアがシエルの柔らかい髪を撫でる。

「それなら準備しないとね！」

シエルが元気よく立ち上がった。

*

視界に入るのは漆黒の壁。岩を高く積み上げた城壁は20メートルを越えているだろう。その城壁の上には甲冑を纏った騎士が24時間体制で見張っている。

「なかなかの警備だねえ」

木陰から砦の様子を眺めているのはジュレイド。ゆっくりと左腰に吊っている拳銃を抜く。リボルバータイプの大口径の銃で連射は出来ないが騎士の甲冑を破壊するだけの威力がある。一度、弾丸を確認。六発入っているのを確認して腰にあるホルダーに戻す。

「さて……では到着を待ちますか」

ジュレイドがぼつりとつぶやく。だが、次の瞬間には右腰に吊っている連射性能に優れた銃を引き抜く。草が揺れると同時にジュレイドは銃を向ける。

「待て！」

声と共に現れたのはジュレイドに仕事を依頼したフード姿の男だ。どうやらわざわざ仕事を確認しに来たらしい。その後ろには体格の

いい男達が10名はいた。共通点は赤いバンダナと丸太のような太い腕に施された蛇の刺青。

「……へえ……同業者か」

ジュレイドは銃を向けたままつぶやく。

「まずはその銃を降ろしてくれ」

男が両手を上げてつぶやく。ジュレイドは仕方なく銃を降ろした。「二つも雇うとは……用意はいいが……ルールに反するな」

ジュレイドは溜息をついた。それは傭兵を信賴していないと言っているのと同じ事だ。そんな依頼主を信賴するほど傭兵は甘くない。「ここで降りるなら……分かつているな」

フードの男が傭兵の背に隠れる。

「ここでドンパチしたら見つかるだろうが」

ジュレイドは溜息をつく。この男と話しているとだんだん頭が痛くなってくる。

「それはこちらと同じ考えだ」

同業者のリーダー格の男がつぶやく。

「ふーん。なら俺は様子を見させてもらっさ」

ジュレイドはつまらなそうに咎を見つめる。

「おい！」

フードの男がジュレイドを睨む。

「……安心しなよ。ちゃんと仕事はするから」

ジュレイドはニコリと微笑む。だが、瞳は全く笑っていない。寒気がするほどである。

「分かった」

フードの男はそれだけを言うのがやっとだった。ジュレイドを無視して咎を迂回していく。どうやら咎に入る前に消すつもりらしい。「昼間から堂々と襲うなんてスマートではないねえ」

ジュレイドは溜息をついて彼らの後を追う。

「ま……ちゃんと仕事するのは本当だ。雇い主が違っけどね」
ジュレイドはぼつりとつぶやいた。

*

馬を走らせてから三時間。砦に近くなったからか道は雑草が減り、だいぶ走りやすくなった気がする。

「急に寂しくなったね」

シエルが地面を見てつぶやく。ノイアも感じていた。今まで見かけた花々がないのだ。

「この辺りは幾度か戦いがあったからな。その痕だろう」

ブレイズがつぶやく。

戦いの傷から立ち直らない大地。どことなく寂しさを感じて三人はそれ以上言葉を発する事ができなかった。

「一雨……来そうだな」

ブレイズが頭上を見上げる。本日は朝から曇り空だった。そして、今は黒い雲が頭上を覆い、今にも降りそうである。

「雨の中を走るのは辛いけれど……今日は砦に着きたいね」

ノイアが頭上を見上げる。雨を凌げる砦に何とか着きたい。そう思った瞬間にノイアの鼻先が濡れた。次には頬に足に雫が降ってくる。どうやら本当に降り出したらしい。

「……悪い事は重なるものだな」

ブレイズの低い声を聞いたノイアは咄嗟に視線を下げる。

赤いバンダナを巻いた屈強そうな男達が視界に入る。その中央には薄い茶色のフードを被った男。彼らから離れるようにもう一人長身の男がいる。彼が仲間かどうかは分からないが警戒する必要があるそうだ。

「下がってろ」

ブレイズは馬から降りて、すかさず剣を抜く。

「シエルは私から離れないで」

ノイアとシエルも馬から降りる。

「この子達は任せて」

シエルは馬の手綱をしつかりと掴む。ノイアは一度頷いてからナイフを抜く。

「行く」

ブレイズは短くつぶやいて地面を蹴る。バンダナを巻いた傭兵が一斉に手にしたボウガンを構える。狙いは当然ブレイズ。

ボウガンの矢が空を切り裂く。視界に入ったのは金属の矢と剣がぶつかった際の火花。そして、鮮血。

「なんだ……こいつ」

傭兵は驚愕の表情を浮かべる。一番前でボウガンを持っていた傭兵が胸を斬られて倒れたのだ。傭兵は慌ててボウガンを投げ捨てる。この距離で使える武器ではない。剣を引き抜こうとした瞬間にさらに鮮血が舞う。身体能力が高いとされる騎士ではあるがこの速さは異常の一言。同じように神力を持たない代わりに高い身体能力を得た傭兵達でさえ追いつけない。

「数人であちらに向かえ！」

フードの男が指示。それと同時に五人の傭兵がブレイズを包囲。すかさず三人の傭兵がノイア達に向かって走る。

「ちっ……」

ブレイズは舌打ちをした。助けに行きたいがブレイズを五人の傭兵が包囲している。包囲した傭兵が一斉にブレイズに斬りかかる。

刹那、耳をつんざくような音が響く。ブレイズは後方にいた傭兵に対する警戒が緩んでいた事に遅れて気づく。だが、ブレイズには何の痛みもなかった。

「がっ……」

突如、ブレイズの目の前にいた傭兵が倒れる。傭兵達が驚いて視線をジュレイドへ。

「外した……悪い、悪い」

ジュレイドが肩をすくめる。一度、ブレイズと視線が重なる。今のうちにどうかしろと言っているように思える。半信半疑だがこの機会を逃す手はない。

「……………」
ブレイズは戸惑っている傭兵を横薙ぎの一閃で切り裂き地面を蹴る。刹那、銃声が轟く。ブレイズの後を追おうとした傭兵が次々に倒れていく。

「貴様………どういふ………！」

フードの男はそれだけしか口にできる事できなかった。ジュレイドが放った弾丸が男の頭部を吹き飛ばしたからだ。

「傭兵なんてこんなもんだよ」

ジュレイドはリボルバー式の拳銃に弾丸を込める。それから視線を前に向ける。

「さて………ここまでやったんだ。どうにかしろよ」

ジュレイドはゆっくりと歩きながらつぶやいた。

ノイアが展開した障壁に剣が激突。眩しい閃光が視界を埋めると同時に、傭兵が障壁の力に押されて吹き飛ぶ。だが、残った二人の傭兵が剣を振り上げて迫る。

「一撃だけなら………」

ノイアは障壁で一撃を受け止めて吹き飛ばし、もう一人の一撃はナイフで止める。がら空きの胸に蹴りを叩き込みたいが、それが出来ないのが悲しい所だ。こんな所で神力を落とすなど考えられない。「武器を破壊すれば！」

ノイアは左手にナイフを握り、力任せに傭兵の剣に叩きつける。

「なっ………んだと」

傭兵は亀裂が入った剣を見て慌てて後ろに飛ぶ。シスターの一撃にはとても見えない。これは騎士が放つ一撃の重さと鋭さだ。

「早く………来て、ブレイズ」

ノイアは走ってくるブレイズを見つめる。その間にも傭兵が左右から剣を振り下ろす。ノイアを倒せば戦えないシエルを倒して終わり。

「ぐっ………」

ノイアは左右からの一撃を両手のナイフで受け止める。

「ノイア！」

シエルの悲鳴に近い声がノイアの耳に届く。

「こんな奴らに負けるか！」

ノイアが叫ぶ。気合を入れるがナイフはすでに限界。亀裂が入りいつ折れてもおかしくはない。諦めかけた瞬間に銀髪が視界に入った。ノイアは安堵の息を吐く。

「待たせた」

声と共に鮮血が舞う。ノイアの右にいる傭兵が力を失って倒れる。最後の一人になった傭兵は数歩後ずさる。

ノイアが一度瞳を閉じる間に銀閃が煌く。耳に入るのは剣響。

「すごい……」

ノイアはそれだけをつぶやくのがやっとだった。高速の剣が幾重も繰り出される。傭兵はついていくのがやっとだった。頬には冷汗が流れている。

「……」

無言でブレイズが剣を振り上げる。激しい火花が散ると同時に傭兵の握る剣が折れる。

「くっ……」

傭兵が剣を捨てて半歩下がる。それよりも速くブレイズが踏み込む。横薙ぎの一閃。

「……あと……一人」

倒れていく傭兵を見ずに黒いロングコートを纏った男を睨む。ノイアとシエルはブレイズの背に隠れる。

「俺はジュレイド……出来れば戦いたくないんだけど」

ジュレイドは微笑んでから銃をしまう。丸腰で歩いてくるが警戒は緩めていない。ブレイズが地面を駆けると同時に銃を抜くだろう。それだけの事ができる自信があるのかジュレイドは気楽そうな笑みを浮かべて近づいてくる。

「……どう見る？」

ブレイズが背に問う。

「……分からない」

ノイアはすぐに首を左右に振る。敵なのか味方なのか全く分からない。

「なら……お話しよー」

ノイアの背に隠れていたシエルが歩き出す。すぐにブレイズの隣を通り過ぎて無垢な笑顔を向ける。

「待て！」

ブレイズが慌てて地面を蹴る。だがすぐに止める。下手に動けない。

「シエルだよ。助けてくれてありがとう」

シエルが笑顔で片手を上げて挨拶。

「ふーん」

ジュレイドがさかさ銃を抜く。すぐに引き金を引かなかったのが唯一の救いである。

「シエル、戻って！」

ノイアの悲鳴に近い声が響く。

「お話にそんな物はいらないよ」

シエルが頬を膨らませる。シエルを狙っているのは大口径の銃。一撃で絶命させる事ができる代物を隠せずに見つめる少女。

「面白いねえ……こっちの依頼にして良かった」

ジュレイドは銃を収める。

次の瞬間にはブレイズが剣を振り上げる。高速の一閃をジュレイドは半歩下がって回避。

「おいおい。こっちは丸腰だぞ」

笑いながらブレイズの剣を避け続ける。

「ちっ……」

ブレイズは舌打ちをする。何が丸腰だと言うのか。避けた瞬間に銃を抜けるタイミングは幾度かあったはずだ。頭の固いブレイズには彼が何をしたいのか理解できない。あまりにも自由過ぎる。

「二人とも駄目だよ」

シエルが二人に向かって叫ぶ。

「あんたは黙ってなさい」

ノイアがシエルの前に立ち障壁を展開。これでとりあえずシエルは守れる。

「お姫様は会話したいみたいですぜ」

なおも避けながらつぶやくジュレイド。ブレイズは舌打ちをしてから剣を止める。

「何がしたい」

ブレイズは仕方なく会話に応じる。目的が分からない。

「本来はそのお姫様を殺すように言われたんだけど……あんたの所の騎士団団長に守ってくれと依頼されてね。ほれ」

ジュレイドがコートに入った手紙を投げる。ブレイズはそれを受け取り中身を確認。

「傭兵は依頼が第一ではないのか？」

ブレイズが問う。

仕事を正確にこなし、依頼主を裏切らない事が傭兵を続けるコツだという事を、小耳に挟んだ事がある。この男は依頼を一つ無視して、別の依頼をこなしたらしい。全く逆の依頼であるならばどちらかを無視するしかないのだが。

「まあ……そうだろうな。でも、俺には当てはまらない」

ジュレイドは残念そうにする。

「力があるのなら全うな事に使うべきよ！」

ノイアが叫ぶ。澄んだ緑色の瞳が真っ直ぐにジュレイドを睨む。

ジュレイドはあまりに澄んでいると思った。真っ直ぐ過ぎる瞳。汚れた自らの瞳とはまるで違う。

「優等生の言葉だねえ。全うに生きれたら……そうしてるさ」

ジュレイドは一度顔を落としたが、すぐに先ほどから浮かべている気楽な笑みを浮かべる。

「今からでも……大丈夫だよ」

シエルが微笑む。その愛らしい笑顔はまさに天使のようだった。
「……………」

ジュレイドはその笑顔を見て戸惑う。今までの過去を洗い流すような笑みだった。おそらくこの少女に少しでも心が触れてしまえば撃てなくなる。そんな気がした。

「で……………どうすんの？ 雇う？ 依頼主はあんたらの団長だけど」
ジュレイドはシエルから視線を外し、ブレイズに問う。このシエルと名乗る少女はこの中で一番危険な気がする。

「団長が雇ったと言うのなら信じよう。この手紙も本物だ」

ブレイズはそれだけを言うのが精一杯だった。そもそもブレイズはこの男に勝てない。殺そうと思えば、この三人くらいは平気で殺せる。だがそれをしないのは何か理由があるのだろう。

「……………これだけ強い人がいれば安心か」

ノイアは顎に手を置いて思考。

「増えた方が楽しいよー」

シエルは笑顔でつぶやく。何事にも臆せず信じるシエル。穢れという言葉とはもっとも遠い位置にいる少女。

「敵わないな」

ノイアはぽつりとつぶやいてシエルの頭を撫でた。シエルはくすぐったそうに小さな頭を揺らした。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 2（後書き）

感想、批評ありましたらお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 3

ただあなたを守りたい シスター見習い編

― 3 ―

「本格的に降ってきたな」

ジュレイドは空を見上げる。戦闘の終わりと同時に強さを増した雨。数分立っているだけでコートはずぶ濡れ、張り付いた髪は不快でしかない。ジュレイドは一つ溜息をついた。

「急ごう」

ブレイズは表情を変えずに素早く馬に乗る。ノイアは不安そうにシエルを見つめながらブレイズの後ろに乗る。

「一人で乗れるか？ お姫様」

馬に乗ったジュレイドが問う。

シエルは一つ頷いてから後ろに乗った。大柄な男二人で馬に乗るのはさすがに無理があるので組み合わせを変えたのだ。シエルをどちらが乗せるかで揉めたが、シエル本人の要望でジュレイドに任せる事にした。単純な強さだけなら何も問題はないのだが、いつ裏切るのか分からない男に重要人物を任せるのは不安で仕方ない。

「行こう！」

シエルが嬉しそうに拳を上げる。シエルは気さくなジュレイドが気に入ったらしく、終始ご機嫌である。

ノイアは何か面白くないと思う。こっそり頬を膨らませて、後方に吹き飛ばされないようにブレイズの肩をしっかりと掴む。

ジュレイドはノイアの反応が面白いのか一度ニヤリと笑い手綱を引く。

「では、行こう！」

ジュレイドが陽気な声を出して馬を走らせる。この飄々とした態

度のせいで何を考えているのか分からない。

「ちっ……」

ブレイズは一つ舌打ちをする。なぜ騎士団団長はこの男に護衛を依頼をしたのか、真意を測りきれない。この男は陽気な雰囲気を漂わせているが、必要であれば平気で仲間を裏切り、どこまでも冷酷に戦えるとブレイズは思っている。警戒する気持ちを抑える事ができない。

「落ち着いて」

ノイアが小声でつぶやく。ノイアの言葉を聞いて急激に頭が冷える。こんな事で平静になれなければ重大な所でミスをする。そして、今までの思考はブレイズの勝手な解釈。真実とは限らない。

「すまない」

ブレイズは短くつぶやいて馬を走らせた。

*

甲冑を身に纏った大柄な男が顎に手を置いて険しい表情を浮かべる。場所はクレイア砦の執務室。先ほどから険しい表情を浮かべているのは砦を任された騎士である。

「本気……なのですか？」

正面に立っている老齢な男が問う。視線が向けられているのは机に置かれた一つの手紙。

「……首都クロイセンからの依頼だ。だがヴァンス殿からの指示でないのが悩む所だ」

男は険しい顔をさらに険しくさせる。この手紙は首都クロイセンの政治の代表者であるヴァンスの手紙ではない。ハーマル派として有名なヴァーンハルトからの手紙なのである。

「何を悩むのですか……。あれだけ優秀なシスター見習いなど……そうはいないですよ。ハーマル派の勢力が強いのは心得ています。が……このご時勢、何が起こるか分かりません。迂闊な行動は控え

るべきかと」

老齡な男が早口に述べる。

大柄な男は一つ溜息をついた。目の前にいる老齡な男性が言いたい事はよく分かる。だが、こちらにも立場がある。

「ふう……それは元副団長としてのご意見かな？　ギルベルト殿」

男は視線を向ける。ギルベルトと呼ばれた老齡な男性はゆつくりと首を振った。

「それは……昔の事です。今はしがない一介の騎士でしかありません」

ギルベルトは顔を落とす。一介の騎士が意見を言ってもいいような案件ではない。だが、味方に刃を向けるなどあつてはならない事だ。どうにかして止めたい、そう思わずにはいられなかった。

「……俺はこの手紙に従おうと思う」

男はそれだけを言つて立ち上がる。対話を拒絶するために背を向け、執務室の最奥にある窓から降り続く雨を見つめる。ギルベルトは諦めたのか一度溜息をつく。

「……分かりました」

ギルベルトは一つ頭を下げて背を向ける。気づかれるように拳を握り締めて。

*

飛び跳ねる泥が甲冑を汚していく。そんな事を気にした様子もなくブレイズは前だけを見る。

「そろそろ……だよね？」

後ろに座っているノイアが問う。目の前にいるブレイズはただ一度頷くだけだった。ブレイズからは常に張り詰めた空気を感じる。一度、襲われたのだから当然と言えば当然なのだが。もう少し肩の力を抜いた方がいいような気もする。ブレイズに倣い常に左右に視線を走らせている自分が言うのはおかしい事なのだが。

溜息をついて視線を右に向ける。そこには気楽な笑みを浮かべるジュレイドがいる。

「なあ……お姫様？」

ジュレイドが後ろに座っているシエルに問う。あまりにも自然なので自分達が命を狙われている存在を守っている事を忘れそうになる。

「なに？」

ジュレイドに張り付くように身を寄せているシエルが小首を傾げる。長年旅をしているような錯覚する起こすほどに馴染んでいる二人。この順応性の高さには驚かされる。

「あの二人……どういう関係？」

ジュレイドが左に視線を向けて問う。ブレイズとノイアの事だ。見た所はお互いを嫌っている様子はない。必要なら体を寄せる事もある。現在も馬に乗るために身を寄せている。だが、恥じらいや、照れなどはない。二人とも年頃である。頬を赤らめるなど、何か反応があってもいいような気がしてならない。必要な事をしているだけという、冷めた恋人同士、または熟年夫婦のような二人。ジュレイドは問わずにはいらなかった。

「うーん。私達はシスターだから恋愛感情とかはないよ。うっん、持つてはいけないの」

シエルが二人を見ながらつぶやく。今も辺りを警戒しながら進む二人。必要ない会話をしているシエル達が不真面目に思えてしまうほど生真面目な二人。

「ふーん。若いのにねえ」

ジュレイドは何だかつまらなそうだ。

若い男女が出会えば恋愛。そんな単純な思考をとりあえず追い出して改めて二人を見つめる。恋愛感情ではなく、どこかでつながり信頼している二人。

「友か……同志かねえ」

ジュレイドはつぶやく。自分にはほど遠い言葉。これが裏切り続

けてきた者に与えられた罰。後悔がないと言えば嘘になるし、それしか方法がなかったのも事実。寂しい人生の終わりがこの少女の護衛。幸せかどうかは分からない。ジュレイドは自嘲の笑みを浮かべて前を見つめた。

「いいなあ……ねえ、ジュレイド」

シエルがジュレイドを抱きしめる腕に力を込める。シエルの温もりが背に伝わってくる。先ほどの暗い気持ちが一瞬だけ霧散して消える。

「なんだ？」

ジュレイドは前を見ながらつぶやく。遠目には漆黒の壁が見える。会話をする時間も限られてきた。言いたい事があるなら全て聞いておきたい。

「私達も……同志に……ううん……友達になれるかな？」

頬を朱色に染めて無邪気に問うシエル。あえて友達という言葉に言い替えたのが、シエルの幼さを伝える。そして、嘘偽りのない本心だと分かった。

「……」

ジュレイドは言葉を返せなかった。今まで聞いたどの言葉よりも重かった。腕の震えが止まらない。どんな相手が現れようと震える事がなかった体。だが、こんなにも小さな少女の言葉に震えている自分がいる。

もう二度と聞く事ができないと思っていた言葉。もう誰も信じてくれないと諦め、乾き切った心を潤す言葉。この体の震えは純粹に嬉しいのだと確信した。

「どうしたの……？ やっぱり嫌かな」

落ち込んでうな垂れるシエル。刹那、ジュレイドの心は万力で絞められたように痛む。今まで受けたどんな傷よりも深く心を抉る。直感的にこの少女は危険だと思ったのは正解だった。だが、もう遅いと頭では理解した。一度、シエルの心に触れてしまったから。もうこの少女に引き金を引く事はできない。こんな小さな少女を殺せ

ない傭兵。ただの笑い種だとジュレイドは思った。

「……そんな事を言ってる……俺が裏切った時に泣くぞ」

ジュレイドはつまらない軽口を言うのがやっとだった。平静でいられない。

「……いなくなったら悲しい。だから泣くよ。私は誤魔化したり、嘘を言ったりできる器用な人間ではないんだ」

シエルがジュレイドのコートに顔を埋める。真っ直ぐな気持ちを伝えてくるシエル。この少女は自分が関わった者が、一人でもいなくなれば泣くのだろう。

「……こんな子を……殺そうとしたのかよ」

ジュレイドは小声でつぶやく。表情には明らかな自嘲の笑みが浮かんでいる。

「お願い……裏切らないで……」

シエルは顔を埋めたままつぶやいた。

「考えとくよ」

ジュレイドは短く返した。ジュレイドにはこの少女は重かった。

チラリと視線を左に向ける。ただ前だけを見て歩み続ける二人。おそらくこれくらいの想いがないと一緒にはいられない。

(……一番の年長者が……一番……ガキじゃねえか……)

ジュレイドは心の中でつぶやいた。去り際を間違えれば一生後悔すると思うジュレイドだった。

*

クレイア街道を走破した四人の視界に入ったのは、漆黒の城壁で守られたクレイア砦。そして、城門にたどり着くための200メートルはある石を積み上げて作られた巨大な橋。橋の下は雨で勢いを増した川が流れている。

「先行する」

ブレイズが言葉の通りに先行。ブレイズの甲冑を見ればすぐに城

門が開くだろう。

橋を半分渡り切り、視線を上げると城門の上にいる兵士が旗を振る。開門の合図だ。

「ようやく屋根がある所に入れるね」

ノイアが安堵の息を吐いた。先ほどから服が張り付いて気持ちが悪い。雨に濡れて体温も徐々に落ち、疲労を感じた体はいつもよりも動きが悪い。

「そうだな」

ブレイズもどこか安心していうようだ。護衛という任務は緊張の連続なのだろう。落ち着きたい気持ちも理解できる。

「……」

だがジュレイドは辺りを警戒している。どうも腑に落ちない。

「どうしたの？」

シエルが問う。この少女はどうも人の心の変化に敏感らしい。ジュレイドの天敵かもしれない。

「お姫様は何にも心配いらさないさ」

ジュレイドは笑う。それと同時に素早く視線を走らせる。

ブレイズを見るなり即座に開門をした所を見るとよく訓練されている。以前に砦を迂回した際も突き刺さるような視線を感じていた。あの時にジュレイドの存在に気づいていない訳がない。仲間として受け入れたか、それとも中に引きずりこんで始末するのか。口を開けた城門が不気味に見えて仕方がない。

「怖いねえ……」

ジュレイドは短くつぶやいた。

*

四人が城門をくぐり抜けるとすぐに門が重量を感じさせる音を立てて閉まる。

開けた空間の中央にいたのは老齢な男性。白髪を肩くらいまで伸

ばし、整えられた口髭と顎鬚が特徴的な細身の男。年齢は60歳に届くくらいだろうか。その男性を見るなりブレイズが瞳を大きく見開いた。

「ギルベルト元副団長！」

ブレイズが馬から降りて嬉しそうに駆け寄る。ノイアはこんなに嬉しそうに笑うブレイズを始めてみた。そもそもあまり笑った所を見た事がない。

「これは……ブレイズ。久しぶりですね」

ギルベルトが微笑む。二人はお互いに手を差し出して握手を交わす。

「へえ……ハールメイツの軍神……ギルベルト・スタンリーか」

ジュレイドが目を見開く。

ハールメイツの軍神。グリア連合国の二倍に渡る軍勢を卓越した指揮と、剣技で三度退けた際に畏怖と敬意を持つてつけられた称号である。神力を持たない騎士ではあったが当時は英雄扱いされていた。現在の騎士団の基盤を作ったのは彼であると言っても過言ではない。

まさかハールメイツの軍神とまで言われた高名な人物が今は重要拠点ではなく一つの砦で一介の騎士をしているとは。彼の噂を耳にする機会が多いジュレイドは驚かずにはいられない。

（……衰えたという訳ではないみたいだな）

ジュレイドが心の中でつぶやく。先ほどから背筋に氷をつけられたような強烈な寒気がする。とてもではないが衰えているとは思えない。おそらく傭兵であるジュレイドにだけ向けているのだろう。信用されないのは当然だ。

他の者の反応を知ろうと視線を向けると、ノイアとシエルは嬉しそうに笑うブレイズに温かい視線を向けている。ギルベルトの事は特に気にはしていないらしい。

「さあ……中にどうぞ」

握手を終えたギルベルトは右手を砦に向ける。一同が一步步んだ

のを見てギルベルトは背を向けて歩き出す。一向は案内されるままクレイア砦に足を踏み入れた。

クレイア砦の内部は入ってすぐに左右に階段がある。二階と城壁に上がるためのものだろう。視線を前方に向けると巨大な木製のドアが見える。おそらくこの砦を治める騎士が使用している執務室だろう。

「ブレイズにノイアさんは執務室へ。シェライトさんとジュレイドさんは私に付いてきて下さい」

ギルベルトがまずは執務室に右手を差し向ける。

「まずは報告だな」

ブレイズは一つ頷いて執務室に向かって歩いていく。ノイアはしばし迷ってから、執務室に向けて最初の一步を踏み出す。どうもシエルと離れるのは不安で仕方ない。一步を踏み出した瞬間にノイアの手にはギルベルトの手が触れる。刹那のタイミングで手紙を握らせる。

ノイアは驚いて振り向く。だがギルベルトは人差し指で自らの口を塞ぐ。何も言うなという事だろうか。ノイアは一つ頷いた。

「どうした？」

ブレイズが不審に思って振り向く。眉根を寄せてノイアを見つめる。だがノイアからは反応がない。何かを手に隠している。ブレイズは一度首を傾げた。

ノイアは掌に収まる手紙をこっそりと開ける。数こそ少ないが通路の左右には騎士が立っている。随時こちらに監視の目を向けており、迂闊に行動はできない。

（……ハーミル派の指示ですぐにでもシェライトさんの命は狙われます。護衛の方もおそらく分散する手筈になっています。どうか合流を）

ノイアは手紙の内容を心の中でつぶやく。内容を理解した瞬間に手紙を落としそうになった。慌てて振り向く。ギルベルトは一つ頷く。次にジュレイドに視線を向ける。

「また後でな」

ジュレイドは気楽につぶやくだけだった。だがその目は笑っていない。随時辺りを警戒し、いつでも銃を抜けるよう左手は大口径の銃に触れている。唯一、シエルだけは無邪気に砦の内部を見回している。

ノイアは拳を握ってからブレイズに体を寄せる。

「なんだ？」

怪訝な表情を浮かべてブレイズがつぶやく。周りの騎士からの視線が痛い。同国の騎士に女連れの騎士などと思われたくない。ノイアの肩に触れて離れようとした瞬間にノイアの口が動く。

「今から会う人は……おそらくハーミル派。気をつけて」

ノイアは小声でそれだけを述べた。ブレイズは努めて冷静を装う。「分かった」

ブレイズは短く述べて執務室に足を向ける。二人は何事もなかったように執務室のドアだけを見つめる。最悪はここからすぐに飛び出さねばならない。緊張の面持ちでブレイズは執務室に続くドアに手をかけた。

*

案内されたのは二階にある来客用の部屋だった。

ジュレイドは大口径の銃を引き抜いてゆつくりと進む。右を見ると白い布団が掛けられたベッドが二つ。左を見ると年代を感じさせる木で作られた机と椅子。正面には窓があり、外の通路を通じて移動できそうだ。

それ以外は何もないシンプルな部屋。目を引くのは机と、枕元に置かれているオイル式のランプくらいだろう。騎士が多いため輝石を使うランプは置いてないようだ。

「敵は……いないか」

ジュレイドは警戒しながら部屋を見渡す。次の瞬間には柔らかな

感触が背に伝わる。シエルが体を寄せたからだ。ジュレイドが一度振り向く。そこには震えて縮こまったシエルがいた。

「……大丈夫？」

シエルが上目遣いで問う。瞳は若干潤んでいる。彼女にとって実戦は恐くて仕方なかったのだろう。そして、今回は頼りのノイアもない。

「ま……安心しなよ」

ジュレイドが努めて陽気に笑う。シエルが小首を傾げる。

「大抵の奴には負けないくらい強いから」

ジュレイドはつぶやくと同時に前方を向く。すつと目を細める。聞こえたのは甲冑が床を蹴る音。数は二人。刹那、銃を正面に向けて。鼓膜を破壊するような音と共に銃弾が空を切る。窓ガラスが割れると共に舞ったのは鮮血。窓に手をかけた騎士が一人倒れる姿が見えた。

「きゃあ！」

シエルは耳を塞ぎ、両目を閉じる。ジュレイドからは体を離さない。

「そのまま閉じてろ！」

ジュレイドは叫ぶと同時にシエルを抱き上げる。シエルは震えながらジュレイドに抱きつくようにしがみつく。小さな両手はしっかりとジュレイドを掴み離さない。

「窓からは無理です」

ギルベルトの声を聞くと同時に、窓に向かって牽制の射撃を放つ。着弾を確認せずに振り向いて走る。背中から聞こえてきたのは甲高い金属の音。

「大楯か……」

ジュレイドは苦々しくつぶやく。

「お早く」

ギルベルトがドアを開ける。駆け出すように外に飛び出したジュレイドは来た道を睨む。幸いまだ通路には騎士は展開していない。

「参りますよ」

ギルベルトは腰から双剣を抜いて駆け抜ける。ジュレイドはシエルを抱く右腕に力を込める。

「離さない」

シエルは震えながらつぶやく。ジュレイドは一つ頷いて地面を蹴った。

*

「これはどういう事だ？」

ブレイズは目の前で椅子に座る大柄な男に問う。ブレイズとノイアを囲むように立っているのは剣を抜いた四人の騎士。

「抵抗をしなければ……同じ騎士だ。手は出さない」

大柄な男が低い声で脅しを掛ける。周りの騎士も剣を構え直す。

騎士剣が一度眩しく輝く。だがこの程度で臆する二人ではない。

「……シエルを狙うなら……ここを出させてもらいます」

ノイアは腰につけているナイフホルダーからナイフを抜く。騎士が一斉にノイアに視線を向ける。いつ斬りかかってきてもおかしくない。緊迫した空気の中でブレイズも口を開いた。

「……仲間に手をかけると言うのであれば……不本意ではあるが剣を抜かせてもらう。俺は騎士団団長の命を受けて……この場にいる」
ブレイズも腰から剣を抜く。

「残念だ」

大柄な男が立ち上がる。それを合図にして騎士が二人に斬りかかる。まず動いたのはブレイズ。右に見える騎士が剣を振り上げると同時に横薙ぎの一閃を放つ。高速の刃が騎士の胴に吸い込まれるように進む。

刹那、ブレイズは舌打ちをした。いつもなら一撃で胴を切断できる間合い。一太刀で勝負を決められる自信もある。だが仲間に剣を向ける事に抵抗があるのか、甲冑にヒビが入る程度の力に自然と抑

えてしまっている。致命傷を逃れた騎士は数歩後ずさり再度、剣を構える。

迷ったブレイズは一瞬だけ反応が遅れる。頬に冷汗が流れた時に、凜とした力強い声が耳に届く。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

障壁を発動させる言葉。刹那、ブレイズの目の前に障壁が展開。障壁を発動させたノイアは左から迫った騎士の剣をナイフで受け流している。ノイアのナイフには迷いが無い。いち早くシエル元にたどり着きたいのだろう。

「……」

ブレイズは一度瞳を閉じる。障壁と剣がぶつかる音が響く。まだ割れる事はない。そう信じられる。ブレイズが現在するべき事は心を落ち着かせる事。仲間に剣を振るう覚悟を持つこと。

ブレイズはゆっくりと瞳を開ける。刹那、障壁が割れる。幾重にも散らばる光を視界に入れる。迫るのは二つの高速の剣。

「……迷わない」

ブレイズがつぶやくと同時に銀閃が煌く。砕けたのは二本の剣。武器を失った騎士は呆気にとられて前を見つめる。視界に入ったのは輝くような銀髪。

「吹き飛ばし！」

ブレイズは左手で鞘を引き抜いた勢いそのまま騎士二人の胴を横薙ぎに叩きつける。鋭い一撃が甲冑を破壊し、騎士二人は壁に激突して意識を失う。気絶する騎士を見つめたブレイズは心が締め付けられる思いがした。どれだけ覚悟を決めても仲間に、同じ国の騎士に剣を向けるのは耐え難い。

「時間を使い過ぎたな」

大柄な男が大剣を振り上げる。ノイアは二人の騎士の剣を受け止めて動けない。声に反応したブレイズは蒼白な顔を浮かべて力の限り叫ぶ。

「ノイア！」

ブレイズが地面を蹴る。男の左隣に駆け、素早く剣を構える。だが今からでは振り下ろされる大剣を止められない。ノイアのナイフでは受け止められない。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

ノイアは真っ直ぐに大剣を睨みながら言葉を紡ぐ。この程度では恐れない。ずっとフィンネ教官の大剣を受け止め続けてきた。そして、自分の神力は規格外のもの。この強すぎる神力のためにシスターになれないのかもしれない。でも、今は必要な力。今すぐにでも泣いているかもしれない少女を守りたい。

「吹き飛ばし！」

ノイアが叫び障壁に力を込める。刹那、閃光が執務室を照らす。

男は何が起こったか理解できなかった。鉄球に体を吹き飛ばされたような感覚がした。握っていたはずの大剣は手にはない。耳に入ったのは大剣が床に落ちる音と、甲冑を砕く不快な音。

「なんだと……？」

男がつぶやいた時には体を斬られていた。両足の力が抜けて男は倒れていく。倒れていく最中、臆せず前だけを見つめ続ける緑色の瞳と一瞬だけ視線が合う。それを最後に全身の力が抜けて男は意識を失った。

「早く治療しろ！」

ブレイズは呆然と倒れた砦の男を見つめる騎士に怒鳴る。騎士二人が剣を捨てて男に駆け寄り、それを見届けて自らは執務室の外に向けて走る。殺さない程度には手は抜いた。甘いと言われるかもしれないが、これがブレイズに出来る精一杯だった。後ろを走るノイアは何も言わなかった。

*

甲高い金属音が立て続けに響く。ジュレイドは進路を塞ぐ漆黒の大楯を睨む。現在は一階に下りるための階段で足止めを食らっている。

るのだ。騎士は大楯を三枚並べて進路を塞ぎ、銃弾を弾きながら前進を続けている。追いつめてから大楯を解除するつもりなのだろう。銃弾を弾けると分かった騎士は落ち着いている。

「こいつを弾くなんて」

ジュレイドは大口径の銃を見つめて苦々しくつぶやく。甲冑を楽に破壊する弾丸を射出するリボルバータイプの銃。だが、さすがに大楯は貫通できないらしい。

「援護を頼みます」

ギルベルトは階段を駆け下りる。真っ直ぐに前を見て双剣を構える。

「簡単に言うねえ」

ジュレイドは残弾を確認してから続く。残弾は三発。右腕が塞がっているために、弾を込める事ができない。現状ではこのまま切り抜けるしかないだろう。シエル一人でこの場を駆け下りるのはさすがに無理がある。シスターは神力が使えるが身体能力はノイアのような例外を除けば、決して高くはない。背についてこさせるなら抱えて突破した方が遥かに楽である。

階段を駆け下りるギルベルトと大楯の距離が2メートルに迫った時に、大楯の隙間から鋭利な輝きが煌く。

「ぎりぎりまで引き寄せなさいと……教えた筈です！」

ギルベルトが階段を蹴って跳躍。大楯の左右から突き出された槍が空を切り裂く。響いたのは二発の銃声。銃弾が大楯の隙間を正確に撃ち抜く。大楯の隙間から鮮血が舞ったのを見たギルベルトは重力に身を任せて着地。最前列の騎士が慌てて大楯を解除。右手に持った槍でギルベルトを狙う。

二つの銀閃が舞うように煌く。突き出された槍をすれすれで回避して槍を切断。その勢いのまま駆け下りて騎士の胴を切り裂く。バランスを崩した騎士が後方にいる騎士に激突するのを確認したギルベルトは身を屈める。

「こいつで最後！」

ジュレイドが引き金を引いた。バランスを崩した騎士の甲冑を銃弾が貫く。後方にいる騎士は体勢を整えるだけで精一杯の様子。

「畳み掛けますよ」

ギルベルトがジュレイドに剣を放り投げる。ジュレイドは銃をホルスターに戻し剣を受け取る。

「ふっ……」

ジュレイドは笑う。目の前にいるのは混乱した10人ほどの騎士。その間をすり抜けるように、進路を塞ぐ騎士は強引に突き落としながら、二人は階段を駆け下りた。

*

ブレイズとノイアは執務室を飛び出して真っ直ぐに砦の外を目指す。ふと左に視線を向けると、騎士が階段から転げ落ちてきた。

「なに！」

ノイアはすぐに警戒する。対するブレイズは落ち着いていた。こんな事ができる人間はそうそういない。ジュレイドとギルベルトが強行突破をしているとすぐに判断した。

「馬を確保して逃げるぞ」

ブレイズは前方を睨む。ノイアはブレイズの背を見つめながら戸惑っていた。まずはシエルの安全を確認したい。だがすぐに気持ち切り替える。ここから逃げ切るには馬は必須だ。あの二人を信じて今は進むしかない。

「道を開ける！ 貴殿が剣を向けるのは……同国の騎士か！」

二人の道を阻もうとする騎士に向けてブレイズが叫ぶ。騎士は一瞬だけ躊躇する。だが、すぐに左右に散らばる10名の騎士が剣を構える。

「今なら！」

ノイアは騎士が躊躇した一瞬で地面を駆け抜ける。騎士が地面を蹴るよりも速く、ノイアが駆け抜ける。狙いを失った騎士の視界に

入ったのは銀髪の騎士。

「……」

ブレイズは剣を構えて深呼吸をする。ここからは状況による。さすがに10名の騎士を相手にするのは骨が折れる。そして、ノイア一人で馬を取り戻せるのかも疑問である。

ただ最善を尽くすのみ。それが今、ブレイズが出来る唯一の選択だった。思考をまとめたブレイズは弾かれるように動き出す。

まず視界に入った右からの騎士剣を横薙ぎの一閃で破壊。すかさず武器を失った騎士の背に回り込む。他の9名の騎士が一瞬だけ動きを止める。完全な敵なら生きた楯にするが、同じ国の騎士にそんな真似はできない。背後に回ったのは最後の説得をするためだ。

「……聞いてくれ。俺達は同じ国の騎士なんだ」

ブレイズは言葉をぶつける。通じる筈だ。同じ想いを持っているのなら。数秒の沈黙が数分の時間を感じる。ブレイズの頬に冷汗が流れた時によりやく騎士が口を開いた。

「……そうだな。悪かった」

ブレイズに掴まれている騎士が苦しそうにつぶやく。他の騎士も一斉に剣を降ろす。ブレイズは安堵して手を離す。これでこの不毛な戦いが終わる。そう思えた。

「よかった。これで戦う……」

だが、ブレイズはそこまで言葉を吐いて止まった。解放した騎士が腰のナイフを引き抜き、ブレイズを刺したのだ。口の中に鉄の味が広がる。

「悪いな……これもここで生きていくには必要なんだ」

ナイフで刺した騎士が冷酷な瞳を向ける。ブレイズは信じた自分が愚かしく思えた。彼らと自分は戦う理由も立場も違う。同じ国にいるが、違うのだ。

「くっそ……！」

ブレイズは左手で騎士の腕を力任せに掴む。騎士は表情を歪ませてナイフを握る手を離す。ブレイズはすかさず剣を振ろうと思った

がバランスを崩す。激しい眩暈を感じ、立ってられない。

「さっさと寝てろ！」

叫び声と共に視界に映ったのは騎士剣。酷く遅く見える。諦めて瞳を閉じた瞬間に投擲された剣が騎士の腕を貫いた。

「お前がな」

ジュレイドの気楽な声が背後から聞こえる。刹那、突風のような風がブレイズの隣を駆け抜ける。ブレイズを守るように立ち塞がったのはギルベルト。

「待ってて」

シエルがジュレイドに抱きついて腕を離し、ブレイズに駆け寄る。立て続けに響いたのは銃声。シエルが離れてようやく両手が使えるようになったジュレイドは銃を乱射しながら、ブレイズとシエルに近寄る騎士を足止めする。

「……神聖なる神よ。我に癒しの奇跡を……」

シエルがナイフを引き抜いて癒しの術式を発動。円形の魔方陣がブレイズを囲む。ブレイズは急に体の力が抜けた。もう意識を保てない。

「任せて……さっさと寝てろ」

ジュレイドの気楽な声を最後にブレイズは意識を失った。

*

一度、二度と立て続けに火花が散る。ナイフとボウガンの矢がぶつかり火花を散らしているのだ。ノイアは城壁の上から放たれるボウガンの矢を弾きながら地面を駆け抜ける。

「つつ……！」

ノイアの表情が歪む。

弾き損ねた矢が右腕を掠ったのだ。真っ赤に染まっていく修道着を見ずにただ前に進む。一度止まれば回避する事は不可能。素早く視線を走らせる。城壁の上には左右それぞれにボウガンを構えた騎

士が五人ずつ。現在はボウガンを放っているが、こちらに降りるための梯子もあり油断はできない。

（……目的地は……ここから右の最奥……）

ノイアはすかさず視線を左に。右手に見える城壁に沿うように走れば右側の騎士は恐くない。問題は左の五人。

城壁から一筋の光が瞬いた瞬間にノイアは口を開く。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

障壁を左右に展開して矢を弾き飛ばす。刹那、ノイアは右手に見える城壁まで一気に駆け抜ける。城壁に沿うように駆け抜けた先に見えたのは、首を金属の輪で固定されている二頭の馬。ノイア達がここまで乗ってきた馬である。

（……ここからは……どうすればいい……）

ノイアは悔しそうに心の中でつぶやく。馬の首を固定している金属はナイフで破壊できる。だが、そんな猶予を与えてくれるだろうか。

ノイアの予感当たった。騎士はすかさず馬に狙いを定めたのだ。ノイアを簡単に止められないのであれば脱走手段を絶つ。ノイアが取れる方法は一つしかない。二頭の馬の前に立ち両手のナイフを構える。高速の銀閃が飛来する矢を全て叩き落とす。すかさず瞳を閉じて深呼吸。

「神聖なる神を。我に守りの力を！」

言葉と共に第二派を障壁で弾き返す。目の前にいる敵はどうにかなる。だが時間をかけ過ぎた。右側の城壁の上いた騎士達が梯子を伝い降りて来る姿を視界の端で捉える。頬に冷汗が流れる。

「……防ぎきれない」

ノイアは一步後ずさる。この場を離れる訳にはいかない。だがどうしようも出来ない。城壁から放たれる矢と、城壁から降りて剣を抜く騎士を視界に収める。ノイアは覚悟を決めた。両手のナイフを強く握り、深呼吸。出来る限り時間を稼ぐ。後は皆がどうにかしてくれる。シエルを守ってくれる。

「それが唯一できる事……！」

ノイアが飛来する矢を睨む。刹那、宙に障壁が展開。障壁に衝突した矢の全てが弾き返される。

「え……？」

ノイアは呆気にとられた。目の前に立っていたのは真紅の甲冑を纏った女性騎士。聖騎士ルメリアだ。

「障壁で身を守っていなさい」

ルメリアの言葉を聞いてノイアは障壁を展開。

ルメリアはノイアが自身を守る事を確認し、腰の剣を引き抜いた。左手は鞘を握る。左に視線を走らせると城壁から降りた騎士五人が迫る。

「……参る」

一言つぶやき地面を蹴る。ノイアが一度瞳を閉じる間にルメリアが一瞬で距離を詰める。

「なっ……！」

騎士が目を見開く。舞ったのは砕けた刃。だが剣を破壊した相手の姿はない。騎士は慌てて振り向く。

「はぁ！」

ルメリアが叫ぶと同時に左手に握る鞘を振り上げる。ルメリアの右側にいる騎士二人の剣をへし折り、左に向き直る。

すかさず残った二人の騎士が剣を振り下ろす。

「神聖なる神よ。我に守りの力を」

ルメリアが言葉を紡いだ瞬間に障壁が展開。騎士の剣を弾き返し、呆気にとられている間に一気に距離を詰める。白銀の一閃と、鞘での一撃が交差。砕けた刃が雪のように舞い煌く。その最中で立ち尽くすルメリアが騎士に視線を向ける。

「……まだやるか」

五人の騎士に問う。騎士は右腰についているナイフに手を添える。だが、頭では理解している。自分達が束になっても敵わないという事を。

ノイアは息をする事も忘れていた。あまりにも速く。そして鋭い。おそらく自分と同じ資質を持った人。だが次元がまるで違う。遥かな高みにいる。同じ事をしろ、と言われれば数年はかかるだろう。

「剣を収めて……こちらの勝ちよ」

ルメリアがつぶやいて視線を砦に向ける。ブレイズを背負って走るジュレイドに、右横で並走するシエルが見える。最後尾はギルベルト。

「今のうちに！」

シエルを見た瞬間に平静に戻ったノイアは馬を高速する首輪をナイフで破壊。手綱を強引に引いて門へと向かう。

「こいつ……任せた」

追いついたジュレイドが背負ったブレイズを降ろす。気絶するブレイズを見たノイアはすぐにでも治療をしようとする。だがその手を止める。今するべき事は違う。

「……今はここから逃げる事だけを……」

ノイアは痛いくらいに下唇を噛んで堪える。ブレイズのためにもいち早くここから離れなければいけない。

「お早く」

ギルベルトが双剣を構えて周囲を警戒する。騎士達の動きは目に見えて鈍い。指揮官を失い、今から追っても間に合わないのだから当然だろう。時折放たれる矢をギルベルトとルメリアが叩き落していく。

「……先に行く」

背にブレイズの重みを感じながら、ノイアは手綱を引く。

「遅れるなよ……じいさん」

ジュレイドが馬を走らせながら涼しげにつぶやく。

「では……私も」

ギルベルトは周囲を警戒しながら全力で門へと駆け抜ける。

「外に馬があるわ。不意だけど……乗せてあげる」

並走するルメリアが小声でつぶやく。ギルベルトは一つ頷いた。

*

夜道を三頭の馬が駆け抜ける。あれからいつたい何時間走っただろうか。雨でぬかるんだ道が確実に馬の体力を削っていく。そして、砦で休む事無く進み続けているノイアは限界が近い。荒い息を整えながら懸命に前を見つめる。意識が朦朧としているのか、先ほどから同じような景色ばかりを見ている気がする。

現在進んでいるはマーベスタの森。クレイア砦を越えた先にある森で、都市マーベスタに向かうにはここを通り過ぎるしか他に方法はない。左右には木目が比較的真っ直ぐに伸びた背の高い木が整然と立ち並んでいる。空を見上げれば針や鱗のように細い葉が日を遮っている。

「どこかで休めないか。もうクタクタ」

ジュレイドが陽気に笑う。まるで疲れている様子がない。

「うー」

ジュレイドの背にもたれるようにしがみついているシエルが呻く。おそらくシエルを休ませるために言ったのだらう。

「もう少し進めば開けた場所があります」

最後尾を進むギルベルトが言葉をかける。

「ブレイズも……気絶したままだから……どこかで休むのは賛成。シエルも疲れてるから」

ノイアは振り向いてつぶやく。表情を変えないのはルメリアだけだ。

「……旅に慣れていない者もいるなら同然ね」

しばし考えてからルメリアは賛成した。

「おっし。姫様、もう少しで休憩だぞ」

ジュレイドが後ろでぐったりしているシエルにつぶやく。

「うん」

シエルは力なく頷いた。

*

テントの中を眩しい光が照らす。地面には読む事ができない文字で満たされた円形の文様が浮かぶ。シエルの癒しの術式である。膝を地面につけて祈り続ける。温かい光が毛布をかけられて眠るブレイズを包み込む。

「ぐっ……」

ブレイズが表情を歪ませる。

「……もう大丈夫だね。起きると思うよ」

シエルは微笑んで立ち上がる。もうここには用はないといったげな背中である。

「もう行くの？」

ノイアはテントを出ようとするシエルの手を引く。

「傷は治せても……ブレイズの心は私には癒せない」

シエルは弱々しく微笑む。

「……それは……私にも」

ノイアが顔を落とす。

「……ノイアなら出来るよ。ずっと一緒に鍛錬を続けてきたんだから」

シエルが微笑んだまつぶやく。今日のシエルはやけに大人びて見えた。どこまで出来るか分からないけれど、力になりたいのは確かである。

「……分かった」

ノイアは微笑んで頷いた。

*

ブレイズはほのかな明かりを感じて瞳を開ける。薄茶色の布が視界に飛び込んできた瞬間にここがテントの中だと気づいた。

「逃げられたのか……？」

ブレイズが独語する。

「ここはマーベスタの森よ」

ブレイズの言葉には返答が返ってきた。視線を向けるとノイアがこちらを見ていた。疲れた表情に少しだけ安心したような明るさが戻る。

「そうか……すまない。迷惑を掛けた」

ブレイズは半身を起こす。表情は沈んでいるように見える。同じ国の騎士と戦ったのだ。沈む気持ちも分かる。そして、ギルベルトの話では説得しようとした騎士にナイフで刺されたいらしい。戦闘の最中のため刺した騎士を責める事はできない。だが、ブレイズが受けた衝撃はかなりのものだろう。

「いいよ。ブレイズには世話になっているから」

ノイアは努めて明るく笑う。実際に世話になってばかりだ。こうしてシスター見習いでいられるのもブレイズのおかげのようなものだ。一人では諦めていたから。

「……俺は……仲間を斬った」

ブレイズが拳を握る。拳は小刻みに震えている。ノイアはその拳を優しく包む。

「……それはシエルを……同胞を消そうとした人達だよ」

ノイアはゆっくりと言葉をかける。

「……それでも同じ国の騎士だ！　なのに……言葉すら通じなかった！」

ブレイズは声を荒げて叫ぶ。両肩は震えていた。

「……それは悲しいよね」

ノイアがしっかりとブレイズの拳を握る。ブレイズがノイアの緑色の瞳を見つめる。

「なら……変えよう。シエルを守り抜こう」

ノイアの強い言葉がブレイズの心を揺さぶる。

「それがこの国のためか……。ハーミルを支持するように見せかけ、

己の事しか頭にない者からシエルを守りぬく。そして……生きて伝える。この国のあるべき姿を」

ブレイズの瞳に光が宿る。

「……うん」

ノイアは微笑んで頷いた。これが正しい答えなのかは分からない。分からないのであれば進みながらも見つけたいと思う。そのためには生きて歩み続ける。今いる皆で。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 3（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想をいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 4

ただあなたを守りたい シスター見習い編

— 4 —

「なかなかの太刀筋だな。素人とは思えない」

ルメリアの凜とした声が早朝の寒空に響く。時刻は午前5時。鳥の小さなさえずりしか聞こえてこない静まり返った場に響くのは剣響。

地に生えた短い草は突風のように地を駆ける二人によって激しく揺れる。

「ナイフを……使ってしまったから！」

ノイアは叫びながら剣を受け止める。目の前で火花を散らしているのは騎士剣。ナイフの限界を感じたノイアは騎士剣に変更する事を選んだのだ。

「……力で負けている相手に鏢競り合いをするな」

涼しげな声が耳に届く。衝突した剣はどれだけ押しても動く事はない。それを可能にするのは、鍛え抜かれた膂力と、天性の体バランス。

「動かないのであれば」

剣を受け止めていたルメリアが力を込める。刹那、ノイアはバランスを崩す。強引にルメリアが剣を横薙ぎに振るったのだ。

「素早く体勢を整えろ」

凜とした声が響く。声と共に繰り出されたのは銀閃。騎士でなければ反応できない高速の輝きが迫る。

「……っ……！」

言葉通りに素早く剣と鞘を構える。瞳を閉じる間もなく銀閃が煌く。両手の剣と鞘で丁寧に受け流す。剣響が寒空に響く。数は5回。

一瞬の間を置いてルメリアが剣を構える。

「この一撃……受け止めて見せる！」

叫びと共に剛剣が振り上げられる。ノイアは咄嗟に剣と鞘を交差。火花が散ったのは一瞬。気づいた時には宙に浮いていた。

すかさずノイアは空中で一回転して地に足をつける。着地を待っていたかのように追撃の銀閃が煌く。だがこの一撃は予想していた。ノイアは左手にありったけの力を込めて鞘で受け止める。

「今なら！」

銀閃が寒空を切り裂く。狙いはルメリアの剣。シスターは人を傷つける事ができない。ならば相手の武器を破壊するしかない。それと共に圧倒的な剣技で戦意を喪失させなければならぬ。そんな無理難題をこなせるのが聖騎士と呼ばれる存在。

「上出来だ」

凜とした声音から柔らかな声音に変わる。聖騎士は満足したように微笑んでいた。

ルメリアの剣から火花が散る事はなかった。ノイアの剣が空を切り裂いた時には半歩下がっていた。結果は空振り。呆気に取られて前を見つめた時には勝敗は決していた。

白銀の刃はノイアの首筋に触れる直前で止まり、左手に握られた鞘は剣を押さえつけている。実戦では剣を砕かれ、いつでも殺せる状態だ。やはり敵わない。これが本職の騎士の腕前。同じ力を持つていても届かない領域。

「参りました」

首筋に触れそうな刃を見てつぶやく。ルメリアはただ緑色の瞳を見つめている。

「どうかしましたか？」

緑色の瞳が真紅の瞳と重なる。答えを求める瞳に耐えかねてゆっくりと口を開く。

「いや……諦めないのだな。私が言うのも何だが……この戦い方は賢いとは言えない。騎士として割り切ったほうが幾分か楽だ」

ルメリアが剣を首元から離して鞘に収める。

「……それでも神力と騎士の力を天から与えられた。それは意味がある事だと思います」

ノイアは剣を鞘に収めながらつぶやく。この二つの力がシエルを守る事に繋がるのなら極めたい。どれだけ困難な道でも。

「……ノイア……君は本当に惜しい人材だな。アルフレッドが気に入る訳だ」

ルメリアは一度微笑んでからテントに向けて歩いていく。この少女は騎士になれば、自分と同格かさらに上にいけると思う。まだ荒削りだがこの向上心は賞賛に値する。だから剣を教えた。ずっと影で見守ろうと思っていたが、どうしても手を貸したくなった。

「……騎士……」

ノイアは自らが握る剣を見つめる。自分自身と国を守るために剣を扱う者。

「……私は……まだシスターだから」

迷える少女が顔を落としてつぶやく。果たして自ら武器をとった者がシスターと呼べるのかは分からない。だが、使える力を無駄にしていられるほど今の状況は優しくない。自国にいながら命を狙われているシエル。同じ騎士が言葉を掛けても刃を向けてくる者達。やれることは何でもしなければ守りきれない。ジュレイド、ギルベルト、ブレイズに頼ってばかりではいけない。ジュレイド、ギルベ

「守りたい人は……自分で守らないと」

ただ強く拳を握った。

*

朝食を済ませた彼らはそれぞれの馬に乗る。

本日の目標は森を抜けて、都市マーベスタにたどり着く事である。「さて……そろそろ話してくれよ」

無言の空気に耐えられずにジュレイドが前を見たままつぶやく。

後ろでもたれ二度寝していたシエルが大きな瞳を開ける。この二人に緊張感などという言葉はないらしい。常にマイペース。本当に気の合う二人である。

「良いでしょう。ですが……警戒は緩めないで下さい」

ギルベルトが口を開く。

堅物二人がすかさず辺りを警戒。賊の一人すら見逃さない緊張感溢れる視線が、背の高い木の間を貫く。ブレイズとノイア。この二人がいれば油断した、などという事はなさそうである。安心したギルベルトがようやく口を開く。

「……結論から言いますと都市マーベスタは安全だと思います。領主のザックス殿は温厚な方で対話を重んじます。そして……騎士団団長とは旧知の仲で、シェライト派として有名ですね」

顎鬚に触れながら私見を述べるギルベルト。

ノイアはとりあえず安堵の息を吐いた。ここで挟まれたらもう逃げ場はなかった。何とか都市についても拘束されて終わりだっただろう。

「へえー、お姫様は人気あるんだな。騎士団団長に、聖騎士、ハーメルメイツの軍神……そして領主様……この国を納める事ができるかもな」

ジュレイドがさらりと危険な事を口走る。

「……」

ギルベルトが顎鬚に手を触れてしばし黙考。ルメリアは涼しい顔をしている。

「ねえ」

ノイアが出来る限り体を寄せて小声で問う。どうしても気になる事があるのだ。

「……なんだ。そんな小声で……らしくない」

ブレイズは眉根を寄せて返す。ノイアに合わせて小声にしてくれるのが彼らしい。

「出来るの？」

「……結論から言えば可能だ。グリア連合国と通じて現政権を撃破すればな。国名はグリア連合国になるが……この国の誰かがここを納める事はできるだろう。その中心人物はシエルになるだろうな。まあ仮定の話だ」

ブレイズは前を見ながらつぶやく。ノイアは疑問を感じた。

「どうして……グリア連合国の誰かが納めたほうが良いのではないの？ そんな事を許してくれるの？」

ノイアは小首を傾げる。分からないという顔をしている。

「……だから賢王だと言われている。仮にグリア連合国の誰かが納めてみる。各地で反乱が続く。どれだけ鎮めても途絶える事なく続くだろう。それを納めるのに何十年、何百年もかかる。それならば今の形をそのままに、国の名前だけを変えてしまった方が早い。安穩とした市民は生活が変わらなければすぐに受け入れてしまう。もう反乱を起こす事はできない」

ブレイズは溜息をつきながら話す。納める者が変わり、国の名前が変わるだけで生活は何も変化しない。ならば立ち上がる者はいないだろう。

「……本当の敵はグリア連合国。とてつもなく大きいね。内輪揉めをしている私達があまりにも原始的な集団に見える」

つぶやいて顔を落とす。

敵国は常に考えている。機会を与えればすぐにでも手を打ってくる。この事実をどれだけの人間が気づいているのか。どれだけの人間が危惧しているというのだろうか。ノイアは不安で仕方なかった。震える拳を強く握って止めた。

*

「王よ。どうして動かないのですか！」

20代中頃の青年が声を荒げる。長い銀髪を腰まで伸ばし、肌は病人のように白い。身に纏っているのは甲冑ではなく胸、腰、膝、

肘に防具がつけられた軽装姿。グリア連合国近衛騎士の一人であるフィッツである。

「今は動く必要がない」

王座に座る王はただ前だけを見つめている。

黒髪を肩まで伸ばした褐色肌が印象的な男。凛々しく威厳に満ちた低い声は、とても20代後半には見えない。王でありながら常に漆黒の甲冑を身に纏い、体は無駄なく引き締まっている。周りからは賢王と呼ばれているが、戦争になれば自ら前線に立ち剣を振るう。そのため国民からは強い支持を得ている。彼こそがグリア連合国の王、アガレスである。

「なぜですか！」

目の前にいるフィッツはさらに叫び続ける。将来を担うシスター見習いが二人も外に出ている。この好機を逃す手はない。

「……かの国が内輪揉めをしているのは知っているか？」

アガレスが瞳を閉じてつぶやく。

「は……はい」

呆気にとられてフィッツがつぶやく。その瞬間にアガレスの瞳が開く。

「なぜだ？」

「そ……それは自らの出世のためにどちらかに肩入れし……あわよくば昇進しようという目論見ではないかと……」

アガレスの問いに何とか言葉を返すが、後半は声音が小さくなる。自信はない。

「……それは一つの理由にすぎん」

「では……？」

フィッツは絶大な信頼を寄せる賢王の言葉を待つ。この王は絶対に正しい。王の言葉を聞き信じれば間違いはない。

「我らが動かないからだ。人は敵を失えば自然と内輪揉めを始める。常に敵がいなければまとまれないのが人間なのだ。下手に動けば二つの派閥はすぐに協力体勢を作るだろう。敵国グリア連合国に抗う

ためにな」

王はゆっくりと立ち上がる。ゆっくりと歩を進める。

「……私が浅はかでした」

近衛騎士が頭を垂れる。やはり賢王に従えば間違いはない。そう信じられる。

「構わん。もう少し学べばよい。それに動かない訳ではない」

「――！」

言葉に出来ない喜びが胸を満たす。ようやく動ける。我らの勝利のために貢献できる。

「本来であれば内輪揉めでどちらか片方が消えると思っていたが……敵にも優秀な者がいるようだ。これ以上待っても結果は変わらない。なれば……」

賢王が拳を握る。

「出撃……ですね」

「ぎりぎりまで引きつける。シスター見習いシェライト・ルーベントが塔に到着した際に叩く。塔の兵力と共にだ」

「了解しました！」

フィッツは胸に手を当てて微笑む。すぐさま振り返って元来た道を駆ける。

「……ハールメイツ神国よ。シェライト・ルーベントの守りをおろそかにした事……後悔するがいい」

アガレスは鋭い眼光をさらに鋭くさせてつぶやいた。

*

都市マーベスタ。首都クロイセンの次に大きな都市であり、北にある塔に武器と食料を供給する重要拠点でもある。門を潜ると中心にある領主の館を中心に十字路が展開。都市の南西、南東は商店街が集まり、北東は住宅外、北西は旅人のための施設になっている。現在、一向は十字路を真っ直ぐに進み領主の館を目指している。

左右は商店が並び道行く人も多い。ジュレイドは辺りを警戒しながらシエルから離れない。

「何……あの赤いの」

シエルが右側にある果物屋を指差す。並べられているのは丸々とした赤い果物で、店主が皮をナイフで剥いていた。剥かれた果物は水々しくて美味しそうだ。

「ああ。この辺りでしか取れないリステの実だよ。甘くて美味しいんだ」

ジュレイドがリステの実を見つめる。シエルも瞳を輝かせて見つめる。それと同時にジュレイドのコートの袖を引っ張る。

「おいおい。おねだりする人間違うって」

ジュレイドが前を歩くノイアを指差す。

「ノイア」

ジュレイドの袖を離してノイアの背に飛びつく。会話を小耳に挟んでいたノイアは溜息について銅貨を二枚渡す。

「毒味だけはしてね」

ノイアは振り向いて微笑む。シエルの安全を確かめられるなら銅貨一枚なんて安いものだ。

「恐いなー、おい」

ジュレイドは仕方なくリステの実を齧り何ともない事を確認。それからシエルに渡す。シエルは頬を朱色に染めて小さな口でリステの実に齧りついた。ジュレイドはそれを横目に自らのリステの実に齧り付く。

「えへへ……お揃いだ」

シエルが無垢な笑顔を向ける。ただ同じ物を食べているだけなのだが、何か善行を終えた気分になるのが不思議である。自分には全く似合わないのだが。

「……あまり時間を掛けないで」

ルメリアが腰に手を当ててノイアを睨む。

「ほほ……そう焦る事ありません」

ギルベルトがシエルを見て微笑む。歩みを止めている原因の少女は柔らかな頬をリストの実で汚しながら笑顔で微笑んでいる。

「そんなに汚して……」

ノイアがシエルの頬を白いハンカチで拭いていく。堅物お姉さんから世話焼きお姉さんに変わったノイアは止まらない。シエルの行動を見つめて何かできないか様子を伺う。

「ありがと、ノイア」

シエルが微笑む。その微笑を見てノイアはこの子はこのままでいてほしいと思った。先ほどブレイズと話していた事なんて、まだ知らなくてもいい。そのままずっと育てばいい。痛い事、辛い事は自分が受ければいいのだから。

「行こう」

ノイアが食べ終えたシエルに手を差し出す。

シエルがしつかりとノイアの手を握る。何だかこの小さな手に触れるのが久しぶりな気がする。数日離れていたただけなのだが、一度触れてしまえば離したくないような気がしてしまうから不思議である。

「さて……では改めて領主の館に向かいましょうか」

ギルベルトが皆を見渡す。

一斉に皆が頷いたのを確認してギルベルトを先頭にして彼らは歩き出した。

*

机に置かれた書類にサインをしているのはマーベスタの領主であるザックス。茶色の髪を短く伸ばした細身で穏やかそうな表情が印象的な人物である。歳は40代中頃だろうか。

場所は領主の館の執務室。書類を整理するための机の他には、左右にぎつしりと専門書が詰まった本棚のみ。他には特に物がない。ここまで豪華な飾り、照明がない執務室はないだろう。贅沢を嫌う

ザックスの性格をよく表わした部屋である。

「すみません」

大人しそうな声を聞いてザックスは顔を上げる。それと共にドアが開き姿を現したのは礼服に身を包んだ華奢な少女。ザックスの一人娘であるミレーネだ。

ザックスによく似た穏やかな表情を浮かべ領主であり、父である男を見つめる。

「どうした？」

ザックスは笑顔を浮かべて問う。ミレーネはしばし戸惑ってから口を開く。

「……クレイア砦に所属しているギルベルト殿がお会いしたいそうなのですが」

「ギルベルト？ ハールメイツの軍神……ギルベルト・スタンリーか！」

ザックスは慌てて立ち上がる。クレイア砦に所属しているのは聞いている。その彼がなぜここに姿を現したのか。クレイア砦に賊が入ったと今朝聞いたが、それと何か関係があるのだろうか。

「と……通しますね」

ミレーネは慌てる領主の反応に驚いて背を向けて走り出した。ザックスは一つ深呼吸をして平静を装う。何かが起きようとしている。どんな言葉を聞いても平静でいなければいけない。自分はこの都市を任された領主なのだから。

*

数分の時を得て現れた人物を見てザックスは空いた口が塞がらなかった。ギルベルトだけでも驚きだが、聖騎士として有名なルメリアまでいる。いったい何が起きれば、この二人が護衛につくような事が起きるのだろうか。

「お久しぶりです……以前にお会いしてから五年は経ちますかね」

部屋に入るなり一行の中心にいるギルベルトが丁寧に挨拶。

「そうですね。またお会いできて光栄です」

「もう老いた身です。そう畏まる必要はありません」

椅子から立ち上がろうとするザックスを手で制す。そんな様子に耐えかねて左隣にいるルメリアが一步前に入る。

「悠長に挨拶をしている場合ではない。早急に行動しなければ」
溜息をついてギルベルトを横目で見ろ。

「私達はここから北にある塔に向かう予定です。しかし……時には傭兵に狙われ……ついに先日は……」

ノイアが代わりに状況を説明する。だが、この先は言ってもいいのか悩む所である。隣にいるブレイズに視線を向ける。ブレイズは無言で一つ頷いた。

「どうしたというのだ？ 私の方にはクレイア砦に賊が侵入したとしか聞いていないぞ」

ザックスが眉根を寄せる。

ノイアは目を見開いた。何か手は打っているとは思っていたが、まさかこんな嘘を平気で流しているとは。

「同じ国の騎士に攻撃を受けました。狙いは……シエル……いえ、シエライト・ルーベントを消すためです」

ノイアは低い声でつぶやいていた。怒りを抑える事ができない。叫ばなかった事が唯一の救いだっただ。

「な……なんだと？ ハーミル派が勢力を増しているのは知っているが……まさかそこまで」

ザックスは明らかにうろたえている。確かに真実を知れば誰でも驚くだろう。

「……この都市での安全を確保して欲しいのです。それと同時に騎士団団長に連絡を。あの方は優秀な方です。何か手は打っているとは思いますが……念のために」

ギルベルトが具体的にこちらの要望を伝える。
「分かった。この館の部屋を使うといい」

ザックスは何とか平静を取り戻してつぶやく。宿を取るよりも目の届く場所で保護した方が懸命だと判断した。皆も納得して一度頷く。

「それと……塔に向かう時なのですが。兵を半分貸していただけませんか？」

「どういう事だ？」

ギルベルトの言葉に、ザックスは立ち上がる。この都市から兵を動かすのは有事の際だけだ。グリア連合が動いたとは聞いていないならば、ハールメイツの軍神とまで言われた男には、凡人には見えない何かが見えているのだろうか。

「……私の予想ですが……仕掛けて来ます」

ギルベルトは表情を険しくさせ断言した。グリア連合国の王は機会があれば逃さない。シエライトを消し、そしてこの都市までは一気に侵攻するだろう。そうなれば後は相手のペース。後手に回ったハールメイツ神国はいずれ負けてしまう。初戦を挫いてどうにか時間を稼ぎたい。この国がまとまるだけの時間を。

「……分かった」

ザックスは頷いた。

北にある塔を守る守備隊が突破されれば、この都市は最前線になる。それならば塔の守備隊と連携して、食い止めるしかないのだろう。塔の兵力を引かせるというのも一つの手だが、この都市を戦場にするのは得策ではない。

「ありがとうございます。ブレイズ、兵を率いた経験は？」

ギルベルトがブレイズに問う。急に振られたブレイズは驚いて目を見開く。

「私は一介の騎士です。そんな経験は……」

ブレイズが首を振る。てっきりギルベルトが率いると思っていた。そうですか。ならばいい機会です。あなたが率いなさい」

ギルベルトが微笑む。ブレイズは一步後ずさる。自分の指示で多くの騎士が命を落とす。

「ハールメイツの軍神の隣には常に……フレイル・マチエスがいました。彼が部隊を率い……私が作戦を立てる。彼がいなければ私は軍神などと呼ばれませんでした」

ギルベルトが微笑む。

「父と……俺は違う。それに父は……結局……」

ブレイズが顔を落とす。父のような才があるのか不明あるし、父は結局戦死した。戦死した者の指示を聞いてくれるのだろうか。しかも、こんな若い騎士の言う事を。

「作戦はじいさんが考えるんだ。いい機会だと思うけど」
ジュレイドは肩をすくめる。

「軍師だけでは戦争は勝てない。胸を張れ……ブレイズ。お前が適任だ」

ルメリアがブレイズの背を押す。ブレイズは戸惑いながらも姿勢を正す。

「……皆の命……私が責任を持ってお預かりします」

ブレイズは胸に手を当ててつぶやく。

「いいだろう。信じよう……君を」

ザックスは一度頷く。本来ならばこの都市を守る隊長クラスに指揮を任せたい。だが、この都市の守りをこれ以上手薄にはできない。このメンバーの中で指揮ができそうなのが一人しかいない以上任せられないのだろう。それに塔までつけば戦争になれた者達が多い。最悪は彼らに任せるといふ手段もある。何とか心を静めたザックスは背を向けるブレイズを見つめた。

*

案内されたのは館の2階にある客室。部屋を見渡すと人が二人は眠れそうな大きめのベッドが四つあり、書き物が出来る机があった。先ほどの執務室よりも豪華に見えてしまうのは気のせいではないだろう。

「本棚まである……えつと……歴史に軍略……あとは政治か。固いねえ」

部屋の奥に鎮座している本棚を見てジュレイドがつぶやく。だが返答はない。

ブレイズはベッドに腰を降ろし、顔を落としたまま動かない。ふとブレイズの肩に手が触れる。

「出発は明日です。ブレイズ……気負わないで下さい」

ギルベルトが微笑む。気休めである事は分かっている。だが気負いすぎて判断を間違えば重大なミスを犯すのも事実である。適度な緊張感を持つて挑まなければならない。

「分かっています」

ブレイズは拳を握る。もはや明日の事しか頭がないブレイズ。すっかりシエルの護衛だという事を忘れている。

そんなブレイズを横目に見てジュレイドは最奥の窓から外の景色を覗く。

「……………」

館の外には石で出来た平坦な道を通行人がまばらに歩いている。目を細めて通行人を凝視。その中で一定のペースで歩いている二人組みを見つけた。周りの市民に合わせた私服姿だが、あまりにも乱れがない。

「ふーん」

ジュレイドはつぶやいて腰に吊っているリボルバーの弾を確認。

ザックスが騎士団団長に知らせるまでは気を抜けない。この館にいても安全だという事はどうやらないらしい。ジュレイドは何事もなかったようにドアへと向かう。

「どこに行くんだ？」

ブレイズがジュレイドの背に問う。

「お散歩」

ジュレイドは右手を軽く上げ、振り向く事なくドアを開けた。

*

ノイアは優しく短い黒髪を撫でる。

「うーん」

シエルが気持ち良さそうに表情を緩める。シエルは客室につくとすぐにベッドに潜り込んで眠り出したのだ。長旅の疲れが出たのだろう。ノイアの左手をしっかりと握り寝息を立てている。

「大変だな」

ルメリアが呆れたような表情を浮かべる。ノイアは微笑んだまま黒髪を撫で続ける。

「そんなに大変ではないんですよ。それに……私も癒されているから」

シエルの無垢な寝顔を見つめる。今までナイフや剣を握り戦っていた殺伐とした世界から引き戻してくれる存在。ノイア自身もどこかでシエルに頼っている。シエルがいれば道を踏み外さないと思える。

「そうか……それもいいか」

ルメリアは窓の外を見つめる。そこには黒いコートを羽織ったジュレイドがいた。一定のペースで前を歩く男達を監視している。おそらく相手も気づいている。ペースを守りつつ館から離れていく。仲間と合流してジュレイドを消すためだろう。皆が他の事で頭がいっぱいである時に影で動く傭兵。彼なりにシエルを守ろうとしてくれている。

「……幸せな奴だな」

ルメリアはシエルの寝顔を見てつぶやいた。

*

一定の間隔でブーツの音が響く。時折、前を歩く二人が視線を向けてくるがジュレイドは何事も無かったかのように気楽な笑みを浮

かべて歩く。隙あらば鼻歌でも歌いそうなほどに力が抜けている。だが、この気楽そうな男の右手はリボルバータイプの拳銃に触れている。一秒でもあれば引き抜き、すぐにでも撃てる体勢は崩さない。それが分かっているため前を歩く二人はまだ行動を起こさない。

「……」

無言で歩いていると男達は館から離れ、北西へと進む。誘っているのが分かる。だがあえて追う事を選んだ。彼らが誰の指示を得て行動しているのか。それを確かめるために。

*

書斎の一室でヴァーンハルトは手にした手紙を握り潰す。

「なぜだ…… 砦から逃れるだと……？ たかが護衛一人と、老人一人加わっただけで」

両肩を震わせてつぶやく。心の乱れが部屋を照らす輝石に伝わる神力を乱す。天井で輝く輝石は光を失い、ベッドの近くにある輝石だけが弱く光る。

「誰か雇ったとしても言うのか？」

ヴァーンハルトは手紙を床に投げつける。証拠を消さねば自らの立場が危うい。政治の代表であるヴァンスが、騎士団団長に気づかれたら終わりである。せつかくハーミルに取り入ってヴァンスと入れ替わる策が途絶えてします。そのために副団長まで護衛につけたというのに。

「早く動かねば……」

ふらつく足取りで自室を飛び出した。

*

「一人で…… 向かった！」

ノイアは声を荒げる。眠っているシエルが驚いて目を開く。

先ほどルメリアが窓の外を指差して、ジュレイドが怪しい二人組を追うために外に出たと述べたのだ。それを聞くなりノイアが叫んだのだ。

「どうしたの？」

シエルは眠そうな顔で半身を起こす。

「ジュレイドが……一人で。早く行かないと」

ノイアが立ち上がり、すかさず駆け出す。

「おい……無策で追わないで。ああ、もう！」

ルメリアは話した事を激しく後悔した。話さなくてもあの傭兵ならば無事に解決できただろう。むしろノイアが行く事で危うい状況になる恐れもある。

ルメリアは一つ舌打ちをして部屋を飛び出す。そして、この行動もよくなかった。もう一人おまけがついてしまったのだ。

「待ってー」

シエルが追いかけて来たのだ。ルメリアは素早く振り向いてシエルを抱き上げる。どうするべきか悩んだ瞬間に男性陣が休んでいる部屋が目についた。勢いよくドアノブを回して開け放つ。

「こいつ……任せた。絶対に出すな！ いいな！」

叫んでシエルを放り投げる。それと同時にドアを勢いよく閉める。

「あわわ……」

シエルが空中で手足をばたつかせる。

「おっと……」

ギルベルトが咄嗟に受け止める。シエルは大きな瞳をさらに大きく見開いて訳が分からず小首を傾げるのだった。

*

「酒場か。昼から酒は飲めないし……ミルクとかあるの？」

ジュレイドは古びた酒場に入り冗談を飛ばす。歩く度に木で出来た床が軋む音がする。中にいた屈強そうな男達が手にした武器を構

える。剣に斧と傭兵というよりは山賊のような輩。数は左右に五人ずつ。正面には後を追ってきた二人組みがいる。丸テーブルを倒し、男達がジュレイドに向かって距離を詰める。

「悪いが消えてもらう」

後をつけて来た者の一人がつぶやく。ジュレイドはまだ銃を抜かない。

「誰に頼まれたんだ？」

ジュレイドは肩の力を抜いて話しかける。それを合図にして周りにいた男達が一斉に走り出す。ジュレイドは溜息をついて両手に銃を構える。

耳をつんざくような音が響くと同時に鮮血が舞う。左右にいた男がそれぞれ一人ずつ倒れる。その隙に距離を詰めた男達が武器を振り上げる。避ける場所はないように見えた。

「おっと」

ジュレイドは気が抜けるような声を出して、武器の間をすり抜けるように移動。標的を失った男達は目を見開く。振り向く間もなく銃声が立て続けに轟く。

「はい。あと四人」

壁に背をつけて悠々と弾を込めるジュレイド。男達は憤慨した様子で武器を振り上げて走る。だがジュレイドは追って来た二人から目を離さない。おそらく危険なのはこの二人。残りの山賊まがいの者は対した事はない。

「ちっ……やっぱりか」

舌打ちをした瞬間に壁を背に横飛び。

轟く銃声。コートの裾を破いたのは一発の銃弾。ジュレイドが地面を一回転して起き上がった時にさらに銃声が轟く。鋭い眼光が銃弾を睨む。軌道を読みきり一歩下がる。銃弾が今までジュレイドの左足があった場所を貫く。追って来た二人が握っているのはリボルバータイプの小振りな銃だった。

「……」

ジュレイドは咄嗟に銃を構える。

刹那、二発の銃声が轟く。ジュレイドは即座に反応。一秒も経たぬ内に引き金を引く。宙で火花が散る。銃弾と銃弾が宙でぶつかりお互いの弾を弾き飛ばす。

銃の援護を得た山賊まがいの男達は自分達が有利だと判断したらしく猛然と突撃してくる。さすがに不利かと思つた瞬間に障壁が男達の進路を塞ぐ。

「ジュレイド！」

ノイアの声が酒場の入り口から聞こえる。一斉に銃がノイアを狙う。

「馬鹿……！」

咄嗟にジュレイドが酒場の入り口に向けて駆ける。その機会を二人の男は見逃さない。男達の予想通りにジュレイドはノイアの前に立ち塞がる。銃声が轟く。

ジュレイドは遅れて引き金を引く。刹那、ジュレイドの右腕と、左足を銃弾が貫く。力を失い膝をついたジュレイドは放った弾丸を見つめる。狙いは完璧なはずだ。

二発の弾丸が空間を切り裂く。銃を持った男二人に狙い通りに直撃する。一発は頭部を貫き、もう一発は手にした銃を破壊する。だがここまでがジュレイドの限界。

「もらった！」

障壁を突破した二人が無防備なジュレイドに武器を振り下ろす。回避しようにも体が動かない。まさか人を庇って死ぬとは夢にも思っていなかった。だが悪行を続けた身にはお似合いの死かもしれない。

「させない！」

力ある言葉がジュレイドの耳に届く。二人の男達が振り下ろした剣をノイアが剣と鞘で受け止める。目の前にいる男達を睨みながら腕に力を込める。だが片手では防ぎきれない。

「それなら……！」

ノイアは半歩下がる。男達が空振りをしたのを見て、剣を構える。
「はぁぁー……！」

叫ぶと同時に地面を蹴る。高速の横薙ぎの一閃。慌てて一人が受け止める。刹那、左手に握る鞘が振り上げられる。舞ったのは白銀の刃。武器を失った男は数歩後ずさる。

「この女！」

男が剣を捨てて落ちていた斧を拾い上げる。一気に距離を詰めて力任せに振り下ろす。

「……っ……」

剣と鞘を交差させて受け止める。激しい衝撃が全身を駆け抜けた瞬間にノイアは判断した。受け止めきれない。押し負けると思った時に真紅の鎧が見えた。

「世話が焼ける！」

鋭い一声が響くと同時に碎けた刃が舞う。

目の前に立ったのはルメリア。剣を素早く男の首元に向ける。

「さっさと行け」

武器を失った二人の男を睨む。即座に男二人が逃走。残ったのはジュレイドが後を追っていた一人。

「……すまないけど……そいつから話を聞きだしてくれ」

ジュレイドがコートの裾で額の汗を拭う。

「ごめんなさい。私のせいで……今から癒しの術式をかけるから」

瞳に涙を溜めたノイアがジュレイドに駆け寄り。癒しの術式を背後に感じながらルメリアは男の前に立つ。

「……」

男は観念したのか抵抗をする様子は見せない。

「誰の指示？」

ルメリアが低い声で問う。男は舌打ちをしてから口を開く。

「ヴァーンハルト……だ」

男は溜息をつきながらある男の名前をつぶやく。その名前には覚えがある。確かヴァンスと同じ政治を務める男で、ハーミル派で有

名な男だ。かなり野心家で隙あればヴァンスに成り代わろうとしていた男である。

「なるほど……ある意味では納得ね。ご同行願える？」

ルメリアが問う。確かな証拠があればヴァーンハルトとて言い逃れはできないだろう。男は力なく頷いた。

「では帰りますか」

ジュレイドが立ち上がる。一応は怪我を塞ぐ事はできたらしい。だが自前のコートには穴が開いていた。コートの持ち主は気にした様子はない。いつもの陽気な笑顔を浮かべているだけだ。

ノイアは力なく頷く。今回は迷惑を掛けただけだった。力になる所か足を引く張る結果となってしまうた。

「今後は迂闊な行動はしないように」

ルメリアは男を連行しながらつぶやく。それ以上は何も言わなかった。

「心配してくれたのは……ありがとう」

ジュレイドがノイアの頭に手を置く。上目遣いでノイアが見つめる。

「惚れるなよ」

ジュレイドがノイアの頭から手を離す。すぐに右手の一指し指を伸ばし、親指を立て拳銃を作り撃つ真似をした。ニヤリと笑う仕草は子供のようだった。

「惚れません！」

ノイアが顔を真っ赤にして叫び返す。

「まあ、ノイアにはあの堅物が似合ってるな」

ジュレイドは背を向けて歩き出す。

「……堅物」

ノイアはぼつりとつぶやく。おそらくブレイズの事だろう。胸に手を当てる。彼に対しては特別な感情はない。友であり、同じ道を進む同志。

「そうだよね」

ノイアは心に確認してから一步を歩んだ。

*

「彼はこの国の騎士に預けたわ」

ルメリアが領主に報告。何の感情も与えない無表情で淡々と述べる彼女の心は見えない。

「分かった。合わせてアルフレッドに報告しよう」
溜息をついてザックスが述べる。

「この国のあり方……もう一度考える必要があると思うけど」
ルメリアはつぶやいて背を向ける。耳に痛い言葉ではあるが事実であると思う。まさかこの都市でも皆と同じようにシェライトの命を狙う者が現れるとは思わなかった。そこまでして昇進を考える者がいるとも思いたくはない。だが今回は具体的な名前まで出てしまった。

「……いい機会なのかもしれないな」
ザックスは顔を落としてつぶやいた。後は首都クロイセンにいる旧友が上手くやる事をただ祈るだけだった。

*

「二人ともどうして無理したの！」

帰った途端になぜか怒られているジュレイドとノイア。さすがに破けたコートで帰ってこれば分かってしまう。

「悪かったよ」

ノイアがどうかシエルをなだめようとする。

「大丈夫。簡単には死なないから」

ジュレイドがシエルの頭に手をのせる。その瞬間にシエルの大きな瞳に涙が溜まる。

「……私のせいで二人が傷つくのは嫌だよ……」

シエルがジュレイドに抱きつく。顔をジュレイドの腹部に埋めて涙を流す。

「悪い……」

ジュレイドはそれだけしか言えなかった。いつもの気楽な冗談は言えない。胸を締め付けて言葉がでない。頼むから泣かないで欲しい。シエルが傷つかないために、怯えないように奴らの後を追ったのだから。これでは何がしたいのか分からない。

「次からは……私にも教えて。ちゃんと耐えられるように強くなるから」

シエルがジュレイドのコートを強く掴む。震えてはいるが確かな強さを感じる。

「……そうか」

ジュレイドは短くつぶやく。それを聞いてシエルが顔を上げる。

「もう……幼いままでも……弱くてもいけない」

強い瞳がジュレイドの瞳と重なる。その瞳からは迷いはなかった。強くなるうと決めた者が向ける強い瞳だった。

「いいんじゃないのか」

ジュレイドが笑う。いつもの陽気な笑顔で。

「しばらく見ないうちに大きくなるんだね」

ノイアは寂しそうな嬉しそうな表情を浮かべる。もう私がいなくてもシエルは歩める。近いうちに世話係ではなくて対等な立場で歩める日が来る様な気がする。そんな日が訪れるようにノイアは天へと祈った。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 4（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想があればお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 5

ただあなたを守りたい シスター見習い編

― 5 ―

「ここに来たということは……戦か？」

渴いた声が耳に届く。無機質な地下牢に座っているのは長身の男。不適な笑みを顔に張り付かせただ一点を見つめている。

「そうだ」

アガレスは男を見下ろす。男は視線を向ける事もない。

「そうか……お前は負ける」

男が淡々とつぶやく。まるで未来が見えているかのような言葉。そんな力をこの男は持っていない。それはよく知っている。

「なぜだ？」

短く問う。だが、男は渴いた笑みを浮かべるだけだった。聞いた答えは返ってこない。何を考えているのかも分からない。

「ならば証明しよう……我の道を」

アガレスが背を向ける。これ以上ここいいても仕方ない。そもそもここに来た事自体に意味はないのかもしれない。

「次の戦い」

「……」

男の言葉に無言で振り向く。男の瞳とアガレスの瞳が重なる。

「お前が負けたのなら……私をここから出せ」

男がゆっくりと立ち上がる。

「負ける事はない」

「そう思つのであればそれもいいだろう」

アガレスの言葉を聞いて男はゆっくりと座る。アガレスは男の瞳を見つめる。ただ一点を見つめ続ける瞳。この男はいったい何を見

ているのだろうか。弟である自分にもそれは分からなかった。

＊

新造された塔の最上階で修道服姿の少女が祈りを捧げる。少女の体から白い光が溢れる。神力の輝きが塔の外壁を照らし、力を送り続ける。

「ハーミル様……もう朝です」

外壁の背に体を預けているセクメトが溜息をつく。徹夜で祈りを捧げるなど正気ではない。

「……」

ハーミルは無言で祈りを捧げる。これが自らに与えられた使命だと背で語っているようである。

「これ以上はお体に触ります。あなた一人だけの身でない事を理解して下さい」

セクメトはゆっくりと近づき祈りを続ける少女の細い肩に触れる。

「……あなたも出世したいのですか」

ハーミルは祈りを止めてぽつりとつぶやく。背に立つ男が震えたのが分かる。嫌でも分かってくる。皆は出世のために自分を担ぎ上げただけだ。真に想ってくれる人はいない。その分ではシエルは幸せだと思う。彼女には絶対に裏切らないノイアが側にいるのだから。

「そのためなら……あたなを守り抜きます」

セクメトが頭を垂れる。あっさりと認めた所は分かりやすいと思う。裏がある人間を信じられるほどハーミルは出来た人間ではない。「そうですか。ならば……今は守ってください」

将来を期待された少女はセクメトを見ずに歩を進める。いつか心から信頼できる者が側にいて欲しいと心の中で強く願った。

＊

「皆を頼む」

腕を組んだ筋肉質の男がブレイズを見つめる。都市マーベスタの騎士をまとめている隊長である。

「はい！」

胸に手を当てて応じる。

目の前の男からすれば20歳も年齢が離れた者に兵を預けるのは不安で仕方がないだろう。だが、彼は不満な顔をせずに若き隊長をただ見つめるだけだった。都市マーベスタを背に佇む男はブレイズにはとてつもなく大きく見える。これだけの器はまだない。だがいつかはここまでたどり着きたいと思う。自らの力で。

「無事に……戻るように」

ザックスが微笑む。

ブレイズは一度頷いて背を向ける。騎士が一斉に道を開ける。その先に立っていたのは手綱を握るノイア。その先に広がるのはハイマイト平原。短い草が生えた平坦な平原で塔までの進路を塞ぐものはない。馬で走るには適した道だと言えるだろう。

「ブレイズ隊長、ちゃんと決めてね」

微笑んで手綱を手渡すノイア。

ブレイズは無言で手綱を受け取り馬に乗る。皆が言葉を待つ。

「グリア連合国との初戦……我らの手で勝利を掴む。自らの剣に誇りを……！」

剣を掲げる若き隊長。

空に響いたのは雄叫び。皆が剣を掲げ叫び続ける。その叫びは地を震わせるほどに力強く、逞しい。

「すごい」

馬に乗ったノイアは短くつぶやく。これが戦争に行く者の覚悟。恐怖を拭うためだと頭では理解している。だが、全身が震えた。それだけ騎士達の声には熱が入っていた。

「行こう、ノイア」

隣で震えた声がする。右を見ると震える手で手綱を握っているシエルがいた。昨日の出来事があったからシエルは目に見えて変わった。今まで馬に乗る時はノイアかジュレイドの背にしがみついていた。だが、今では自らの力で乗っている。振り落とされないか不安ではあったが何とか乗りこなしている。

「何があっても守るから」

ノイアはただそれだけを述べた。こんな所で死なせない。強く思い馬を走らせた。

*

真紅の髪を無造作に伸ばした大男が塔を見上げる。昼を過ぎ日差しを増した光に目を細めて最上階を見つめる。その視線はどこか寂しげだ。

「この防衛もこれで最後か」

大男が丸太のような太い腕を組む。この塔の防衛を任されてもう40年になる。新米としてここに派遣され、幾度か敵国と戦ってきた場所。男が立つこの渴いた地面には幾重もの仲間と敵の血が染み込んでいる。

「グリア連合国の騎士が動いた」

一定のペースを崩さない足音と共に低い声が男の耳に届く。男はゆっくりと振り向く。そこには男と同年の細身の男が立っていた。白髪のオールバックと、左目につけた眼帯が印象的な男だ。

「大将はアガレスか？ 最後の防衛としては満足だな、グレン」

男が視線をグリア連合国に向ける。鋭い眼光をさらに鋭く細め睨みつける。

「ここに骨を埋める事ができないのは残念ではあるな」

グレンと呼ばれた男は顔を落として笑う。この地で散った仲間を思えば死ぬまでここを守り抜きたい。

「ふっ……そんな事では先に逝った者に笑われる。皆を集めよ！

これが我らの最後の防衛だ」

男が指示を飛ばす。グレンは胸に手を当ててから背を向ける。

「もう一度だけ……力を貸してくれ」

男は瞳を閉じて祈った。

*

目の前に広がるのは湿原地帯。泥を弾きながら一定のペースで馬を走らせているのは漆黒の甲冑で身を包んだ一団。中軍が前に出て、両翼を下げた「」の形をとる偃月えんげつの陣を崩さずに、頭上高くに見える塔を見つめる。陣の先頭を進むのはグリア連合国の王アガレス。彼を中心に主力部隊が集まり、左翼、右翼は主力部隊には劣るが年配のベテラン騎士が固めている。

「各位、気をつける。落ちたら助からないぞ！」

アガレスの右隣に位置するフィッツが叫ぶ。

地面には短い草が生い茂り、所々に水が溜まっているよくある湿原地帯。だが、この湿原地帯は沼地のようにぬかるんだ場所があり、落ちれば底なし沼に落ちたように沈んでいく。ものの数秒で全身が自然に飲み込まれ、一度落ちた者を救う手段はない。

「その程度の事で臆する兵はおらん」

アガレスが瞳を閉じてつぶやく。騎士達は王の背を見つめる。

「我らにあるのは勝利のみ」

王の言葉に騎士は背を伸ばし胸の甲冑を叩く。金属の音が一斉に鳴る。この国の忠誠を示す合図である。守るべき王が自ら前線に立ち、最前線を進む。後に続く騎士はただ信じて後に続くのみ。その心に迷いも、恐怖もない。

「我は負けん。絶対にな」

王は塔を睨みつけて短くつぶやいた。頭をよぎるのはあの男の言葉。それを振り切るようにアガレスは塔を睨み続けた。

＊

月明かりに照らされた平原をひたすら走り続け、見えてきたのは白亜の塔。

「あと数刻で到着だ。だが気を抜くな！ ついた瞬間に戦闘になる可能性もある」

先頭を進むブレイズが指示を飛ばす。騎士に緊張が走る。都市で予備兵力として扱われていた彼ら。戦慣れしていない者中にもいるのだろう。

「緊張する必要ないぜ。こっちはハールメイツの軍神様がいるんだから」

場を破壊する陽気な声が響く。皆がジュレイドを見つめる。緊張した彼らにニヤリと笑みを向ける。

「気休めになるかは分かりませんが…… 負けた事はございません」
軍神が皆の不安を拭い去る。騎士達の表情には安堵の笑みが浮かぶ。ギルベルトは素早く彼らの表情を確認する。これならば戦える。緊張して動けなくなった兵よりかは幾分かましである。

「誰か来たよ」

シエルが小さな手を前方に向ける。馬に乗って平原を駆けるのは一人の真紅の髪をした大男。

「ほう。ジェイス殿ですか」

ギルベルトが顎鬚に触れる。

「塔の防衛をしている隊長か」

ブレイズは大男を見つめながらつぶやく。男はギルベルトの目の前で馬を止めた。近くに立つとさらに大きい。縦だけではなく、鍛え抜かれた肉体のおかげで横にも膨らんで見える。

「俺はジェイス。そちらの隊長はギルベルト殿か？」

ブレイズを見ることもなくギルベルトに視線を向ける。当然と言えは当然だろう。

「俺がこの一団を率いているブレイズだ」

ジェイスに向けて右手を差し出す。その手を意外そうな瞳で見つめるジェイス。微笑んではから手を差し出す。

「すまない。若い隊長だな」

「それは心得ています」

手を握り合い二人は言葉を交わす。

「現在の状況を教えて下さい」

ギルベルトが二人の会話に割って入る。今はとにかく時間が惜しい。作戦を伝達するには少なからず時間が必要である。その間に敵が来てしまえば無策で戦うようなものだ。それだけは避けたかった。「分かった。塔に向かいながら説明する」

ジェイスは馬を塔に向ける。

ブレイズが手を掲げて合図すると同時に騎士達が続く。

「今夜か……早朝か」

ノイアは塔を見つめながらつぶやく。並走するシエルを見つめると顔は真っ青だった。でも、前を見つめて懸命に馬を走らせる。手を貸したくなる。だが、ここで手を差し出したら以前のシエルに戻ってしまう。ノイアは拳を握って甘い自分を追い出す。胸が締め付けられる。その痛みを堪えてノイアは痛いほどに拳を握った。

*

ほのかなランプの光が一枚の地図を照らす。地図の上には騎士の形をした石の置物が各地に置かれている。

「別働隊か……」

ジェイスは地図を見てつぶやく。塔の前にはジェイスを中心に円を描いて守る方円の陣が敷かれ、北西には一つの部隊を置くらいしい。真北には敵を示す騎士が置かれている。

「はい。この辺りの地形は進行可能な場所が限られています。彼らは南に真っ直ぐに進行する他に道はありません。迂回路もあります。時間が掛かりすぎます」

ギルベルトが敵の騎士を南に移動させる。

「それではこの北西の部隊はどう進むのですか？ 沼地を避けるのは不可能ですよ」

ブレイズが顔をしかめる。相手の進路が限られるのと同時に、こちらの進路も限られている。

「ああ。この塔を守るのはいつも一本道でぶつかるだけだ。下手に迂回しから沼地に落ちて終わりだ」

ジェイスが腕を組む。沼地を駆け抜け抜けろというのはあまりにも無理がある。

「——私が道を作ればいいんですよね？」

一人の少女が急に言葉を発する。緑色の瞳が皆を順番に見つめる。「その通りです」

ギルベルトがノイアを見つめて一つ頷く。

「ほう。障壁で道を作るのか」

ジェイスは感心したように地図を見つめる。

「側面からの攻撃は都市マーベスタからの援軍で務めます。数が多すぎれば奇襲には向かないでしょうから」

ブレイズが提案。奇襲を失敗すれば全滅。危険なのは承知しているが、それは後から来た者が務めるべきだと思う。

「若いと言ったことは訂正しよう」

ジェイスの手が肩に触れる。ブレイズは男の瞳をしっかりと見た。「生きて戻れよ」

短くつぶやいてテントの外に出る。もう決める事はない。後は敵が来るのを待つだけだ。

「そつえばシェルはどうしてるんだ？」

ブレイズが地図から視線をノイアに向ける。

「もう塔に登ってる。ルメリアも一緒だから心配はいらない」

ノイアが微笑みを向ける。

「あなたでなくてよかったのですか？」

ギルベルトの表情が曇る。昨日からノイアはシェルを避けている

ように見える。

「あの子は私から離れて大きくなろうとしてる。だから側にいてはいけないんです」

ノイアは儚く笑う。表情を見れば分かる。心配で溜まらないのだろう。今すぐにでも駆けつけて抱きしめたいと顔に書いてあるようにも見える。

「その想いは伝わっていますよ」

ギルベルトが微笑んで返した。

*

塔の最上階を小さな足で懸命に登っているのはシエル。額には汗が浮かび、荒い呼吸を繰り返している。

「ジュレイドに運んでもらった方がよかったのではないか？」

後ろを歩くルメリアはさすがに心配になってきた。「上まで運ぼうか、お姫様？」いつもの軽口を叩いたジュレイドをシエルは首を振って断固辞退。今は自らの足で塔を登っている。

「強くないといけないから。もう足手纏いは嫌」

シエルは胸の前で拳を握りつぶやく。小さな背中はどこか力強く見える。でも、まだまだ支えは必要である気がする。手間のかかるお姫様だとルメリアは思う。

「ノイアだつて戦場に立つ。怖いけど……私にできる事をするよ」

シエルの細い肩は震えている。それでも歩む足は止めない。本当はノイアに抱きついて甘えたいのだろう。そして恐怖を拭きたい。だが少女は振り向かない。ルメリアにも頼ろうとしない。その想いを受け取って後ろを歩く世話係代行が口を開く。

「ならば……シエル。お前の力を見せてやろう」

優しい声が背に届く。肩の震えが一瞬だけ止まる。

「——うん！」

シエルは力強く頷く。いつも世話を焼いてくれたノイアに一人前

の姿を見せたい。そんな想いが伝わってくる。

「まるで親子みたいだな」

ルメリアは呆れながらつぶやいた。

*

時刻は午前三時。月明かりを浴びて騎士剣が白銀に輝く。

「夜戦か……」

ブレイズは湿原に立つ軍勢を見つめる。

ここまで乗ってきた馬は食料として潰したらしく、グリア連合国の騎士達は湿原を自らの足で進んでいる。一定のペースで進む甲冑姿の部隊はどこか不気味な印象を受ける。まるで感情のない人形が歩を進めているようだ。

「今なら敵からの発見が遅れる。好都合だ」

ジュレイドが小声でつぶやく。こちらを発見されるのも時間の問題だが、上手くいけば奇襲をかけられる。

「ねえ……先頭を進んでいる人……嘘……」

ノイアは敵の部隊の先頭を進む人物を見て肩が震えた。敵国の王であるアガレスである。シスターであつても見間違える訳はない。前線に出て来ただけでも驚きだが、敵国の王の行動を見てさらに目を見開いた。

アガレスは一度左手を上げる。部隊が一斉に停止。敵部隊との距離は約100メートル。前方の騎士が握っている弓がぎりぎりで届く範囲。

「——ふっ——！」

アガレスは即座に地面を蹴る。刹那、一斉に矢が放たれる。煌いたのは銀閃。飛来した矢は宙で折れ地面に突き刺さる。

一瞬の空白。ハールメイツの騎士達はたった一人で矢を全て弾き返した敵国の王を呆然と見つめた。その一瞬の時をグリア連合国は

見逃さない。

「続けー！ー！」

フィッツの怒号の叫び。漆黒の甲冑を纏った騎士が一斉に地面を駆ける。一瞬の遅れと共に矢が雨のように降り注ぐ。

「大楯部隊……構え！」

指示を受けて先頭を進む部隊が一斉に大楯を構える。二列目を進む騎士は頭上に大楯を掲げ、そのまま疾走。

矢の第二波を大楯で防いだグリア連合の騎士は勢いを衰える事無く前進。

「ぎりぎりまで引き付けろ！ 武器をボウガンに」

副隊長のグレンが即座に指示を飛ばす。騎士達は手にした弓を放り投げて腰につけているボウガンを構え屈む。

「狙いは足。射撃と同時に大楯部隊は前へ！」

グレンの指示を聞いた瞬間に矢が湿原に生える草を貫きながら疾走。脛の甲冑を砕き、最前列の騎士が倒れる。だがこの程度で敵は止まらない。即座に二列目の騎士が掲げていた大楯を降ろし前進。中央突破を目指す。

「——陣を鶴翼へ……急いでください」

ギルベルトの声を聞いて大楯を構えた部隊が突撃。敵の進路を塞ぐ。

刹那、方円の陣を崩す。指示通りに両翼が前方に張り出し「V」字型の鶴翼の陣に変更するために騎士達が疾走。両翼の間に敵が入った瞬間に包囲、殲滅をする陣形だ。

「勝った」

アガレスは敵の陣を見て勝利を確信した。中央突破を狙う我らを両翼が挟んで殲滅するつもりだろう。戦いながらこつと早く陣を変えてきたのは賞賛に値する。だが、すでに遅いとアガレスは断定した。

「——はっ」

短く息を吐き目の前にいる大楯部隊を一閃の元に崩したアガレスは疾走。狙いは手薄になった陣の中央にいる敵の指揮官のみ。突破してしまえば、この陣は意味をなさない。また指揮官を失った部隊など烏合の衆に過ぎないのである。このままに勢いならば難なく突破できる。

勝利のためにアガレスは地面を蹴る。自らが進む事で自国の騎士が続くようにと。

*

祈りを続けるシエルの耳に届くのは戦の音。騎士達の叫び声に金属がぶつかる音。塔の最上階にいても外での戦いの緊張感は伝わってくる。

「……………」

シエルが一度呻く。不安で溜まらない。あの中にノイアがいる。誰が死んでもおかしくない戦場に。そう思うと震えが止まらない。

「信じる」

ルメリアがシエルの肩を掴む。だが震えは止まらない。

「強くなるんだろう。簡単な事でないのは分かってる。でも……負けるな」

優しい声がシエルを支える。

「——うん！」

シエルは一度頷いてから祈りを捧げる。光が塔を照らす。力が首都クロイセンに伝わっていく。力が足りない時の補佐として付いてきたルメリアだったが、どうやらその必要もないらしい。一人では無理だからと付いてきたノイア。だが、数日間の旅で彼女は一人で使命を達成できるまでに大きくなった。まだ震えてはいるが一步を歩もうとしているシエル。

「将来が楽しみではあるな」

ルメリアは微笑んでつぶやき、塔の最上階から戦場を見下ろす。視界に入っただのは光輝く道だった。

*

光の道を突き進むのは真っ白な甲冑に身を包んだ部隊。

「――続け！」

ブレイズの声が戦場に響く。騎士達が電光石火の勢いで駆け抜ける。

「まずはご挨拶！」

銃声が轟く。

グリア連合の部隊は部隊右側から受けた攻撃に足が一瞬止まる。今が絶好の機会。これを逃せば相手の突破を許してしまう。

「行け！ ノイア！」

ジュレイドの声を聞いて、剣と鞘を逆手に握り、湿原地帯を体勢を低くして駆け抜けるノイア。刹那の時点で一気に接近。銀閃が敵国の剣を破壊する。

「――騎士の意地を見せる！」

ブレイズの叫びを聞いて騎士が迷わず地面を蹴る。シスターの少女が一番に突撃したのだ。騎士である自分達が迷っている場合ではない。覚悟を決めた騎士が怒涛の勢いで突撃をした。

「馬鹿な……どうやって」

アガレスが振り向いた瞬間には側面からの攻撃を受けた部隊は混乱状態。突破のための勢いも衰えている。偃月えんげつの陣は主力を前方に置いて一気に突破する陣形。側面には主力はおらず奇襲を受ければひとたまりもない。

「余裕だな。アガレス！」

太い声が響くと共に剣が振り下ろされる。

アガレスは剣を受け止めたと同時に視線を走らせる。刹那、ハ―

ルメイツの騎士が左右から剣を振り上げる。

「ジェイスか……面白い策を使う」

強引に横薙ぎに剣を振るいジェイスを吹き飛ばす。刹那、一息と共に高速に一回転。高速の銀閃が左右から迫る騎士を斬り捨てる。単体での強さでは止まる所を知らないアガレスであったが、戦局は刻一刻と姿を変えていく。

「両翼……閉じて下さい。包囲します」

ギルベルトの指示を受けて、V字の陣形がグリア連合の騎士を挟むように移動。

「皆、引け！」

フィッツが部隊に指示を出す。向かうのは手薄な敵の右翼。奇襲を行った部隊に背を向ける事になるがこのままでは全滅してしまう。「主力を殿にして撤退！」

アガレスは後方に跳躍すると同時に奇襲を行った部隊に向けて突撃。グリア連合の騎士は王に背を向けて撤退の道を切り開くために地を蹴った。

「おいおい。正気かよ……この王様」

ジュレイドは舌打ちをした。

王アガレスは撤退する事もなくこちらに向けて突撃してくる。一人でも多くの騎士を救うために。何よりも恐いのが主力部隊の瞳。突撃する王を見て死ぬ気で剣を振るう様はもはや人間を越えた存在に見える。

「ぐっ……」

左隣にいるブレイズの呻き声を聞いて素早く銃を向ける。ブレイズの目の前にいたのは漆黒の甲冑に剣を三本刺した騎士。倒れてもおかしくない状態でおも剣を振っている。

「くっそが！」

ジュレイドは叫んで引き金を引く。できる限り苦しまぬように頭部を正確に撃ち抜く。ただ敵を撃っただけだが、こんなにも気分が

悪いのは初めてだった。これが戦争だと割り切るには重すぎる。

「はぁー！ー！」

ノイアの叫び声が戦場に響く。ジュレイドとブレイズが慌てて視線を向ける。

響いたのは剣響。二つの剣が火花を散らして交差する。

「貴様が原因か」

アガレスが目の前にいるシスターを睨む。まさか湿原に障壁を展開して突破するとは。ここまでの奇策を使ってくるとは思わなかった。だが、次はない。

「そうよ。そして……あなたの道はここで終わりよ！」

左手に握る鞘がアガレスの剣を狙う。

「くだらん」

アガレスは半歩下がって回避。刹那、銀閃が煌く。ノイアに向けられた一閃は突如現れた障壁に弾き飛ばされる。目を見開いた時にはノイアが振り上げられた銀閃が視界に入った。

舞ったのは白銀の刃。佇んでいるのは剣を握る異色の少女。

「ノイア！」

「王！」

ブレイズとフィッツの叫び声が響く。叫び声を聞いてお互いに後方に跳躍。代わりに剣をぶつけたのはブレイズとフィッツ。

「やらせない」

血走った瞳がブレイズを睨む。もはや前だけしか見えていない。あまりにも真っ直ぐで愚直。ブレイズは目の前にいる人物が一瞬自分と重なった。だが、手を抜くつもりは一切ない。

「ジュレイド！」

ブレイズは叫ぶと共に左に横飛び。フィッツの視界が開けた瞬間に見えたのは黒いコートを纏った男。

「悪いな」

銃声が轟く。

「——っ」

フィッツは急激に頭が冷えた。冷静になった頭でも今の状況をどうにかする方法はない。瞳を閉じた瞬間。甲冑を砕く音が耳に入る。だが、痛みが体を駆け抜ける事はなかった。

「フィッツ……お前は引け」

瞳を開けると目の前には王が立っていた。左手の籠手で銃弾を防ぎ悠然と立っているアガレス。

「アガレス！」

ブレイズは叫ぶと共に地面を蹴る。高速の銀閃。舞ったのは火花。

「……」

「……」

二つの視線がぶつかる。ブレイズの剣を止めたのはアガレスが右手に握る鞘。ルメリアやノイアがよく使う手段だ。

「潮時か……」

アガレスは短くつぶやいてブレイズを力任せに吹き飛ばす。立て続けに宙を切り裂く弾丸を鞘で弾き飛ばしながら退路を進むアガレス。

周りにいた騎士達がアガレスを追うために一斉に地面を蹴る。

「深追いはするな。慎重に進め！」

ブレイズは焦る騎士の背に叫ぶ。騎士は一度止まり隊列を整える。その間にはグリア連合国の部隊は撤退を終えていた。

「……これは……勝利なのか……？」

ブレイズは力が抜けた。地に膝をつけてぼつりとつぶやく。数だけの計算なら勝利。塔も防衛できた。だが、それと同時に敵の強大さを身を持って経験してしまった。こんな相手がまた攻めてくる。

「何度でも……追い返そう。出来るよ、ブレイズなら」

隣に立ったのはノイア。緑色の瞳はただ前だけを見ている。

「やらなければいけないんだな」

ブレイズはふらつきながら立ち上がる。視線を向けるのは首都クロイセン。光の壁は力を取り戻して強く輝いている。遠目でもはっきりと分かるように。新造の塔に加えて、守り切った塔からも神力

が流れているのだろう。これで首都の防衛は安心できる。

「とりあえずの安心は確保。問題は山積みだけだな」

ジュレイドは塔を見上げる。その塔では今もシエルが祈りを続けているだろう。彼女の元に平穏は訪れるのだろうか。敵国を追い返したから安心。そんな簡単ではない問題が、山積みのような気がしてならないジュレイドであった。

*

翌朝。ヴァーンハルトは礼服に着替えを終えた瞬間にドアがノックされた。

「誰だ？」

ヴァーンハルトは不機嫌さを隠す事もなくつぶやく。声を聞いてドアを強引に開けて入ってきたのは騎士団団長アルフレッドと、ヴァンス。その後ろには騎士が数人待機している。

「……」

ヴァーンハルトは言葉を失った。ついにこの時が来てしまった。

「シスター見習いシエライト・ルーベントを自らの利権のために消そうとした。間違いはないか？」

騎士団団長がヴァーンハルトを睨む。手に握られているのは一つの手紙。

「何を馬鹿な事を……」

ヴァーンハルトが一步後ずさる。誰かが口を割ったとでも言うのだろうか。

「捕らえた者が貴殿の名前を口にした。まずは話を聞かせてもらう」指示をすると同時に騎士が部屋に入る。ヴァーンハルトの両腕をしっかりと固定して連行していく。

「待て。話を……ヴァンス！」

ヴァーンハルトは叫びながら抵抗を続ける。だが、騎士の力には敵うわけはなく、次第に声は遠くなる。

「……これからだな」

ヴァンスが騎士団団長を見上げる。

「ああ」

アルフレッドは一つ頷いてから背を向けて歩き出した。

*

賑やかな声が朝日が出そうな時刻に響く。グリア連合国を追い返した彼らは即座に酒盛りを始めたのだ。

お酒が飲めないノイアは壁に背をつけて溜息をついた。シエルは祈っており、ブレイズは同じ騎士に囲まれて談笑している。特に話す相手がおらず退屈なのだ。

「ノイアさん。溜息をついてはいけませんよ」

ギルベルトが隣に立ち一言つぶやく。今は話し相手がいる事が素直に嬉しい。

「暇なのよ」

ノイアは楽しそうにしている銀髪青年を見ながらつぶやく。

「ほほ……そうですか。ジジイでは役不足ですな」

ギルベルトはテーブルに置かれたお酒を持ち飲み始める。周りにいる男達のようにお酒によって騒ぐ事ができたら楽なのかもしれないとノイアは思う。

何度目かの溜息が出そうな時に修道服が控え目に引っ張られる。

驚いて右を向くと同じ修道服を着た少女がいた。

「ルメリアと交代した」

シエルが嬉しそうに微笑む。一仕事を終えたような清々しい笑顔をしている。

「そう……上手く出来たみたいだね。私は……駄目だね。もうシスターというよりは騎士だから」

ノイアは儚く笑う。ふと小さな手がノイアの手を優しく包む。

「それが……ノイアだよ。シスターでもあるし、騎士でもある」

シエルの瞳は真剣だった。この少女だけはノイアがどんな道を進んでも受け入れてくれるような気がする。

「ありがとう。シエル……」

ノイアは屈んでシエルを抱きしめる。

「ノイア……」

「うん？」

耳元で囁くシエル。ノイアは久しぶりの感触に心が安らぐのを感じる。何か言いたそうなシエルに言葉をかける。

「大好き」

頬を赤らめてシエルがつぶやく。

ノイアの心に今までの悩みを全て吹き飛ばすような清々しい風が流れる。心がぽかぽかと温まる。不覚にも涙が出てしまった。

「う……っ……」

ノイアは涙を堪える事ができなかった。どうしても涙が出るのか分からない。戦いの恐怖を今になって感じているのだろうか。そうだとするのならいったいどれだけ鈍い心をしているのだろうか。

「大丈夫だよ」

シエルが抱きしめる力を強くする。ノイアはさすがのようにシエルを抱きしめた。いつもとは立場が逆だが、今日だけはシエルの優しさに触れていたかった。

*

「あいつは負けただろう？」

牢にいた男が看守に聞いた声を掛ける。いつものように冷たい地面に腰を降ろし、一点を見つめている。

看守の頬には嫌な汗が流れる。牢の中にいるにも関わらず恐怖が心を占める。震えて動けない。何か出来る訳でもないのだろうか。
「まあいい。いずれ分かる」

男は一度微笑みを浮かべる。看守はその笑みが悪魔の笑みにしか

見えなかった。どうして兄弟でここまで違うのだろうか。

剣の腕、軍略においては現王アガレスをはるかに上回る男。だが、その性格に問題がある。

半年前にとある騎士がクーデターを起こした。それを鎮圧するために出陣したこの男は僅かな手勢で勝利を収める。その結果だけを見れば賞賛に値する。だが、裏では抵抗を止めた騎士を全て惨殺し、彼らを匿った市民も虐殺したのだ。

前王からは王の器ではないと追放を言い渡された男はその場で父である前王を殺害。最終的には兄と弟に分かれての争いに発展した。その争いの結果は現王の勝利。この男は今もこの冷たい牢の中に閉じ込められている。

「さて……ハールメイツ神国。どれだけ耐えられる」

男は不適に笑いゆつくりと立ち上がる。

看守は怯えて一步下がる。耳に入っただのは男をつなぐ拘束具が音を立てて破壊される音だった。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 5（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。今回は戦争パートですので、分かりにくい点などがありましたら感想、メッセージをいただければ幸いです。

キャラ紹介、世界観紹介（前書き）

今回はキャラ紹介です。参考にして下さい。

キャラ紹介、世界観紹介

ただあなたを守りたい

人物紹介・世界観紹介

世界観紹介

一、大陸マクシリア

神力と呼ばれる力に満ちた大陸。神力はこの大陸で生活するには欠かせない力。

例えば、首都の夜道を照らしている街灯は「輝石」と呼ばれる石に神力を注ぎ、輝かせる事で光源になっている。調理に使うコンロなども内部に輝石が入っており、神力を注ぐ事で火を起こしている。

神力は6歳を超えた時に宿るものであるが、人によって力の強さも、身に宿る神力の絶対量も異なる。中には全く神力を持たない人間もいる。神力を持たない者はガスや油などを使い火や光源を得ている。

二、国紹介

ハールメイツ神国

大陸南部に位置している国家。

北西、北東は天然の山々で守られ、背面は海に面して敵がない。急所である首都クロイセンは光の壁で守られており、唯一の脅威は北にある強国、グリア連合国のみ。

光の壁はシスターの長と各地に散らばる塔に神力を注ぐ事で成り立っている。塔が一つでも破壊されれば光の壁は力を失う。そのため騎士の多くは首都よりも塔の防衛に力を注いでいる。

塔を首都の近辺に置かない理由は、神力の影響を強く受ける土地があるからである。その場で神力を使用すれば10倍以上の効果が得られるため首都と離れた場所の建設を余儀なくされている。

光の壁を失えば数日で強国に飲み込まれると言われており、塔の維持とシスターの存在は必要不可欠となっている。

シスターとは神力が特に強い者を教会で養成して資格を与えた者と呼ぶ。特に女性の方が神力が高い者が多いため、ハールメイツ神国ではシスターが重要視されている。

グリア連合国

賢王と呼ばれるアガレスが治める国。

対立する国は圧倒的な武力でねじ伏せ、対話が可能であれば時間をかけてでも説得して取り込んでいる、この大陸最強の国。

王自身が騎士である事から武力を中心に国が纏まっている。「ハミル派」と「シェライト派」の内輪揉めを好機とみて軍を派遣。以後は戦争状態に突入する。

ハールメイツ神国のキャラクター紹介

一、メインキャラクター

ノイア・フィルランド 年齢15、16歳

髪色は金髪で腰までの長さ。瞳の色は緑。

本編の主人公で規格外の神力の持ち主。だが、絶対量が少なく正式なシスターになるのは絶望的な状況。代わりに常人よりも身体能力が高く騎士の素質を持っている特異な少女。

早朝から鍛錬をするなど生真面目で堅物。ただルームメイトのシエルに対しては甘く世話好きな一面がある。

補足

「神の代行者」の二代目シラヌイの激しさと、エレナのおっとり

した所を足したキャラ。早朝鍛錬をするのは私の作品の主人公のお決まりパターン。

シエライト・ルーベント 年齢12歳

黒髪を短く伸ばした少女。瞳の色は青色。

外見も精神年齢も幼く甘えん坊な最年少のシスター見習い。規格外の神力を持つノイアと同等の神力を持ち、絶対量もトップクラスの「神に愛された者」。

本名が呼びにくいので皆は「シエル」と呼んでいる。世話係であるノイアに甘える場面も多々あるが、旅を通して成長。自ら立ちとうとする。

ブレイズ・マチエス 年齢16歳

銀髪に青い瞳。

寡黙な騎士。ノイアと同じ場所で早朝訓練を行っていた少年。ノイアに頼まれたのを気に護衛を引き受ける。剣の腕は一級品だが、性格に難ありという評価を受けている。かなりの堅物で冗談などはまず口にしない。

本編では同じ国の騎士と戦った時、大勢の騎士の指揮を任された時は迷いを見せるなど年齢相応の姿を見せる時もある。

父の名前はフレイル・マチエス。ハールメイツの軍神、ギルベルトと共に数多の合戦を勝利に導いた男を父に持つ。その資質を受け継いでいるとギルベルトは信じて、ブレイズに騎士の隊長を任せる事を決めた。結果は初戦を勝利に導く電光石火の突撃を見事に成功させる。

ジュレイド 年齢20代中頃 正確な年齢は24歳。

髪と瞳は茶色。常に黒いロングコートを羽織っている。かなりの長身。

気さくな人物で常に陽気。時折、冗談も飛ばすムードメーカー。

本職は傭兵でシエルを消す依頼を受けるが、同時に護衛の依頼を受け、後者を選んだ。傭兵を続けているのは母親の薬を買うため。人生に疲れていたがシエルの心に触れて徐々に前向きになっていく。

ルメリア 20代後半

髪、瞳、甲冑と全てが真紅。すらりとした体型。

騎士でありながら神力が使える規格外の騎士。剣の腕は女性騎士で一位、二位を争う腕を持っている。彼女に与えられている称号は聖騎士。

ノイアと同じ素質を持つ人物で、本編では剣の使い方を教える場面もある。ノイアのいい見本となる人物。右手に騎士剣、左手に鞘を持つという独特の戦い方をする。

性格はメンバーの中で一番理知的。無駄を嫌い注意する場面も見られる。

ギルベルト・スタンリー 年齢は58歳。

白髪を肩くらいまで伸ばし、整えられた口髭と顎鬚が特徴的な細身の男。

グリア連合国の二倍に渡る軍勢を卓越した指揮と、剣技で三度退けた経歴を持つ人物。畏怖と敬意をもって「ハールメイツの軍神」と呼ばれている。現在の騎士団の基盤を作ったのも彼である。

丁寧な口調で話す落ち着いた人物で、常にメンバーを気に掛けている心優しい人物。

ハーミル 年齢 24歳

輝くような銀髪を腰まで伸ばした女性。

シスター見習いを近日中に終える予定。「神に愛された者」であるシエルに匹敵する力を持ち、将来はシスターの長になると噂されている人物。彼女に取り入り、出世を目論む人物は後を断たない。彼らを総じて「ハーミル派」と呼んでいる。

おっとりとした人物ではあるが、博識で世界の流れを正確に把握している才女。同じく将来を担うと噂されているシエルとも対立する姿勢は見せておらず、逆に共に歩もうと思っている。

サブキャラクター紹介

騎士団所属の人物

アルフレッド 年齢40代後半。

大柄で筋肉質な男。銀髪をオールバックにし、無造作に伸ばした髭が印象的な人物。騎士団団長。

「ハーミル派」と「シェライト派」で内輪揉めをしている現状を何とか止めたいと考えている人物。努力家であるノイアを騎士にしたいと声を掛けているが失敗続きである。

努力するものは見捨てないという心情を持ち、神力を持たない人間が最後に頼るのは彼だと言われている。人望が厚いだけではなく、ジュレイドなど有能な傭兵にシエルの護衛を依頼するなど用意周到な一面もある。

セクメト 年齢35歳。

副団長。禿頭。

ハーミルの旅に同行する男。今回の任務でハーミルに取り入り、騎士団団長になる事を狙っている。「ハーミル派」として有名なヴァーンハルトと通じている。

教会所属の人物紹介

ミシエル 年齢22歳

ウェーブがかかった茶色の髪に、やや吊りあがった髪色と同じ瞳が特徴的な少女。第一話でノイアを世話係と蔑んだ少女。のちに反

省して謝罪の言葉を述べるなど素直な一面もある。

アーバン 年齢50歳程度

白髪に丸眼鏡が印象的な人物。優しいだけではなく、時には厳しい現実を突きつける大聖堂の司祭。どちらの派閥にも属さない中立の立場を貫いている。

フィンネ 教官 30代

180センチオーバーの長身。引きしまった体格。
シスター見習いを鍛える教官の一人。元騎士。大剣でシスター見習いが張る障壁を叩くという恐怖の訓練を行う鬼教官。さっぱりとした性格。

政治担当の人物紹介

ザックス 40代後半

マーベスタの領主。茶色の髪を短く伸ばした細身で穏やかそうな表情が印象的な人物。騎士団団長アルフレッドとは旧知の仲で、彼と考えを同じにする人物である。ミレーネという一人娘を持つ。

ヴァンス 40代後半

礼服に身を包んだ長身の男。首都クロイセンの政治を任されている人物。騎士団団長アルフレッドと共に内輪揉めの終息を求めている人物。また、まっすぐに穢れを知らないシエルが歩む道を見たいと思っている。どちらかといえば「シェライト派」の人物。

ヴァーンハルト

ハーミル派として有名な政治を担当する人物。砦での襲撃、都市マーベスタにて刺客を送るなど全てはこの男の指示である。ついでに二話では名前が出ていないが、ヴァンスと会話していた怪しい人

物はヴァーンハルトである。

塔の守備隊

ジェイス 年齢は58歳。

真紅の髪を無造作に伸ばした大男。丸太のような太い腕をした筋肉質な人物。

北東にある塔を守っている隊長。グリア連合国の国境線に近い塔に配属されたために数多くの合戦を経験している。新造の塔が建設されて役目を失うが、最後の防衛戦では勝利を収めている。

性格は豪胆。前線では指揮をするよりも自ら剣を振るう事が多い。

グレン 年齢58歳

北東を守る部隊の副隊長。白髪をオールバックにし、左目につけた眼帯が印象的な細身の男。

隊長が前線で剣を振ってしまうので、代わりに部下に指示を出すのはこの男。冷静で常に落ち着いている。

グリア連合国

フィッツ 20代中頃

長い銀髪を腰まで伸ばし、肌は病人のように白い。身に纏っているのは甲冑ではなく胸、腰、膝、肘に防具がつけられた軽装姿。グリア連合国近衛騎士の一人。

王であるアガレスを慕い、忠誠を誓う騎士。直線的で愚かなほどに真っ直ぐな人物。

アガレス 年齢20代後半

黒髪を肩まで伸ばした褐色肌が印象的な男。凛々しく威厳に満ちた低い声は、とても20代後半には見えない。王でありながら常に

漆黒の甲冑を身に纏い、体は無駄なく引き締まっている。周りからは賢王と呼ばれているが、戦争になれば自ら前線に立ち剣を振るう。そのため国民からは強い支持を得ている。

キャラ紹介、世界観紹介（後書き）

第5話現在のキャラクター紹介です。定期的に修正、更新をすると思います。作者のメモ書きに少し手を加えた程度なので、不足している部分があると思います。名前とどんな立場の人物だったか確認するのに使用して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6491x/>

ただあなたを守りたい

2011年10月31日18時34分発行